

---

土地分類基本調査

---

お の にい まち  
小野新町

5万分の1

国 土 調 査

福 島 県

1996

# 序 文

福島県は、東京から300km圏内にあって全国有数の広大な県土を有し、大きく発展する可能性を秘めております。

また、21世紀を目前にして「ふくしま新世紀プラン」を策定し、良好な自然環境の保全を図りながら快適な郷土づくりを目指しています。

このような観点から、本県では昭和46年度より国土調査法に基づき、縮尺5万分の1の地形図を基図とする都道府県土地分類基本調査を実施しており、これまでに29図幅を完了しております。

本調査は、土地の自然条件と利用状況に関して、その図幅単位に「地形」「表層地質」「土壌」「土地利用現況」等を地図と簿冊にまとめるものです。

今回は、阿武隈地域の南部「小野新町」図幅についてその成果をとりまとめたものであり、この調査結果が現在当該地域内において進められている地域開発、保全及び土地利用の高度化等各種計画の基礎資料として関係各位に広く利用されることを期待いたします。

おわりに、本調査の実施にあたり御指導、御助言をいただきました国土庁土地局国土調査課をはじめ、関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成9年3月

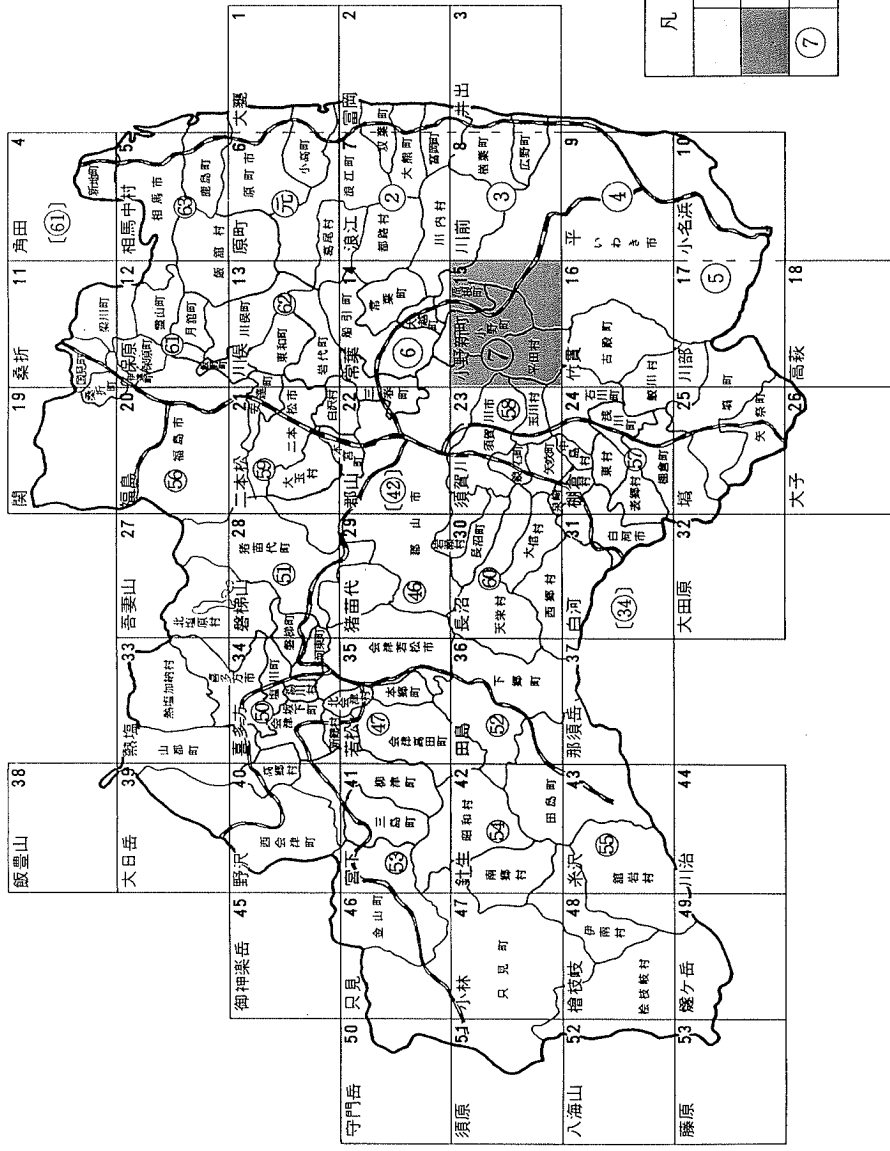
福島県農林水産部長

齋藤 信一

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第2条第1項第2号に規定する都道府県土地分類基本調査であり、関係する各作業規程準則（総理府令）に基づいて作成した「福島県土地分類基本調査作業規程」により、福島県が実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項4の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により建設大臣の刊行した5万分の1の地形図を使用した。
4. 調査の実施、成果の作成機関及び担当者は下記のとおりである。

調 査	地 形 調 査 地形分類	福島大学教育学部教授 中村嘉男 福島市立三河台小学校教諭 高橋正之
	傾斜区分	福島大学教育学部教授 中村嘉男
担 当	表層地質調査	元福島北高等学校教諭 吉田 義 福島大学教育学部教授 真鍋 健一
	土 壤 調 査 農地土壤	福島県農業試験場主任専門研究員 菅野 義忠 専門研究員 吉田衛史 副主任研究員 三浦吉則 研 究 員 田口明広
事 務 担 当	林地土壤	福島県林業試験場主任研究員 今井辰雄 研 究 員 高原尚人
	関 連 調 査 土地利用 現況調査	奥羽大学文学部教授 大澤 貞一郎
事 務 担 当		福島県農林水産部農地計画課 主任主査兼国土調査係長 上野隆司 主 査 鈴木修治

本県の都道府県土地分類基本調査実施状況及び位置図



凡	例
	調査済
	今回調査
⑦	調査年度

※調査年度の〔 〕は、国調査・他県調査を示す。

# 目 次

## 総 論

I 位置及び行政区域 .....	1
II 人 口 .....	3
III 地域の特性 .....	5
1. 自然的条件 .....	5
〔地形的環境〕 .....	5
〔気候的環境〕 .....	5
〔表層地質〕 .....	7
2. 社会・経済的条件 .....	8
IV 主要産業の概要 .....	11

## 各 論

I 地形調査 .....	21
1. 地形分類 .....	21
2. 傾斜区分 .....	29
II 表層地質調査 .....	32
III 土 壤 調 査 .....	45
1. 農地土壌 .....	45
2. 林地土壌 .....	53
IV 土地利用現況調査 .....	63

## 成 果 図

I 地形分類図	
II 傾斜区分図	
III 表層地質図	
IV 土 壤 図	
V 土地利用現況図	

福島県土地分類基本調査：小野新町

**総**

**論**

# I 位置及び行政区域

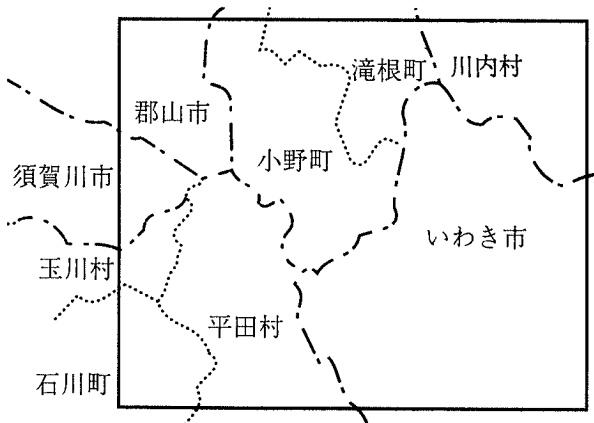
## 1. 位置

「小野新町」図幅の区域は、福島県の中通り地方東側、阿武隈高地のやや南部に位置し、経緯度では東経 $140^{\circ}30'$ ～ $140^{\circ}45'$ 、北緯 $37^{\circ}10'$ ～ $37^{\circ}20'$ の範囲にあり、図幅内の面積は $410\text{km}^2$ である。

## 2. 行政区域

この図幅内は、いわき市・小野町・平田村の一部で過半数を占め、郡山市・滝根町の一部と須賀川市・石川町・玉川村及び川内村の僅かの面積が含まれる。即ち3市と3郡に属する3町3村からなる。

第1図 図幅内の行政区域



また、市町村別総面積と本図幅内に占める割合は第1表のとおりである。

第1表 図幅内市町村別面積表

(単位：km<sup>2</sup>，%)

市町村名	区分	市 全 体 面 積 (A)	村 体 面 積 (A)	図幅内面積 (B)		占有率 (B/A)	備 考
				面積	構成率		
福島県全体		13,781.82					
郡山市		731.05		34.81	8.5	4.8	
いわき市		1,231.04		122.42	29.9	9.9	
須賀川市		154.98		7.82	1.9	5.0	
石川町		115.75		3.08	0.7	2.7	
玉川村		46.56		6.87	1.7	14.8	
平田村		93.53		85.38	20.8	91.3	
小野町		125.11		109.37	26.7	87.4	
滝根町		50.70		32.47	7.9	64.0	
川内村		197.38		7.78	1.9	3.9	
計		2,746.10		410.00	100	14.9	

(注<sup>1</sup>) 総面積は福島県勢要覧(平成7年版)による。

(注<sup>2</sup>) 図幅内面積はプラニメーターによる計測値である。



## Ⅱ 人 口

福島県全体の人口の推移をみると、昭和55年に2,035千人台だったものが、平成元年には初めて2,100千人に達し、平成8年4月では2,129,917人となり、その後も微増している。

このような本県状況の中で、調査区域の各市町村の傾向をみると、郡山市及び須賀川市の増加率が県平均を大きく上まわる反面、その周辺市町村では減少する傾向がみられるが、その割合も近年は小さくなる傾向を示している。

本地域の人口及び世帯数の推移は第2表のとおりである。

(福島県勢要覧(平成7年版)より作成)

第2表 人口及び世帯数

(単位：人，戸，%)

市町村名	昭和55年		平成2年		平成6年		人口増加率		人口密度	備考
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	6年/55年	6年/2年		
福島県全体	2,035,272	550,442	2,104,058	606,936	2,129,089	645,116	4.6	1.2	154.5	
郡山市	286,451	85,116	314,642	99,931	324,321	108,242	13.2	3.1	443.6	
いわき市	342,074	97,391	355,812	109,291	360,111	117,069	5.3	1.2	292.5	
須賀川市	57,110	14,306	60,695	16,311	63,385	17,933	11.0	4.4	409.0	
石川町	21,731	5,061	21,534	5,330	21,180	5,480	△2.5	△1.6	183.0	
玉川村	7,431	1,493	7,631	1,667	7,676	1,741	3.3	0.6	164.9	
平田村	8,804	1,836	8,523	1,882	8,337	1,914	△5.3	△2.2	89.1	
小野町	14,085	3,380	13,431	3,413	13,248	3,508	△5.9	△1.4	105.9	
滝根町	5,621	1,298	5,653	1,356	5,548	1,348	△1.3	△1.9	109.4	
川内村	4,132	1,020	3,933	998	3,763	1,029	△8.9	△4.3	19.1	
計	747,439	210,901	791,854	240,179	807,569	258,264	8.0	2.0		

(注) 福島県要覧(平成7年版)より作成。

### Ⅲ 地域 の 特 性

#### 1. 自 然 的 条 件

##### 【地形的環境】

阿武隈山地のほぼ中央部を占める本図葉域には、同山地のほとんど全域を覆う隆起準平地形の諸特徴がふんだんにみられる。すなわち、特定の複数の高度幅の中に、山頂緩斜面・山腹緩斜面や定高性山稜が集中することから、上下3段（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面）の小起伏面群に分けられること、準平原の隆起（第四紀初頭）に引き続く河川の侵蝕復活により遷移点から下流側にV字谷が形成されて、上流側の小起伏・緩傾斜地域と、下流側の大起伏・急傾斜地域とに分化したことの2点はその代表的な特徴である。前者については、蓬田岳、矢大臣山、羽山、万太郎山、鬼ヶ城山等の山頂緩斜面がⅠ面、一本山毛櫨いつぽんがなほかいくつかの山頂緩斜面と、いたるところにのびる定高性山稜がⅡ面の存在をそれぞれ示している。Ⅲ面の主体は、本図葉外北・西隣にひろがる。後者に関しては小野町・平田村およびいわき市西北部にひろがる小起伏地が極めて特徴的である。

##### 【気候的環境】

阿武隈山地内の標高500m前後の小盆地では、県内中通り地方や浜通り地方の低地帯とはかなり異なった気候的環境が認められる。小野新町地域気象観測所（田村郡小野町小野新町館廻92、小野町役場、標高433m）の1976年以降の記録（第3表）をみると、年平均気温は10.1℃で、地形的環境のよく似た船引10.1℃、川内10.0℃と大体同じで、石川（290m）11.0℃、白河（355m）11.1℃より若干近い。日最高気温 $\geq 30^{\circ}\text{C}$ （13.3日）は、郡山（230m）20.2日、石川22.2日よりも少ないが、白河12.8日、船引9.2日、川内10.2日などよりも多い。また日最高気温 $< 0.0^{\circ}\text{C}$ （いわゆる真冬日）は13.7日で、船引17.9日より少ないものの、川内11.7日、石川6.6日ばかりでなく、白河7.6日、郡

山8.3日よりもかなり多くなっている。年降水量1,232mmは中通り地方の平均的な値である。最深積雪の平年値は30cm弱である。

なお、日最大風速 $\geq 10$ mはわずか0.2日で、郡山5.5日、福島12.0日にくらべて極めて穏やかな気候を示している。

### 第3表 気候表

小野新町地域気象観測所

(小野町小野新町館廻92, 小野町役場)

要素		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年		
気温 (°C)	平均	-1.3	-0.9	2.3	8.2	13.5	17.5	20.7	22.7	18.3	11.8	6.3	1.6	10.1		
	最高平均	2.9	3.1	7.0	14.1	19.4	22.4	25.2	27.6	22.6	17.1	11.6	6.3	15.0		
	最低平均	-5.8	-5.0	-2.4	2.1	7.3	13.0	17.0	18.7	14.4	6.7	1.3	-2.9	5.4		
降水量 (mm)		26.5	58.8	79.3	96.5	102.9	116.8	168.3	190.1	168.4	123.5	70.1	27.0	1,232.0		
風速 (m/s)		1.4	1.5	1.6	1.5	1.4	1.2	1.0	1.1	1.0	1.2	1.2	1.3	1.3		
階級	気温 (°C)	日平均<0.0	22.0	17.5	7.0	0.3						0.7	8.5	55.9		
		日最高<0.0	6.8	5.4	0.4								1.1	13.7		
		日最低<0.0	29.6	25.8	23.9	9.8	0.7					1.8	12.3	25.8	129.7	
	別日数	降水量 (mm)	日平均 $\geq 25.0$						2.3	4.8	0.3				7.3	
			日最高 $\geq 25.0$				0.3	3.3	7.8	16.6	24.3	7.4	0.2		60.0	
			日最低 $\geq 25.0$													
			日最高 $\geq 30.0$					0.2	0.3	4.1	8.3	0.4			13.3	
別日数	降水量 (mm)		$\geq 1$	6.4	7.3	10.5	10.9	9.5	11.8	13.8	10.2	12.8	9.8	7.8	4.9	115.2
			$\geq 10$	0.6	1.9	3.1	3.7	3.9	4.3	6.5	4.3	4.5	4.1	2.3	0.9	39.2
		$\geq 30$		0.4	0.3	0.3	0.6	0.7	1.7	2.1	1.5	1.2	0.3	0.2	9.4	
		$\geq 50$				0.1	0.3	0.3	0.2	0.9	0.5	0.4	0.2		2.8	
		$\geq 70$				0.1		0.1	0.1	0.8	0.4	0.2	0.1		1.8	
		$\geq 100$								0.5	0.3				0.8	
別日数	日最大風速 (m/s)	$\geq 10$							0.1		0.1			0.2		
		$\geq 15$														
		$\geq 29$														

日本気象協会福島支部(1995)：『福島の気候百年誌』による。

### 【表層地質】

本図葉の地域は、阿武隈高地の主峰である大滝根山（1,192.5m）の、南側から南西側一帯の地域にあたる。

本図葉の地域に発達する表層地質としては、第四紀の未固結堆積物、先白亜紀の固結堆積物、白亜紀に貫入したとされる、深成岩の花崗岩質岩石と斑糲岩質岩石、および、先白亜紀の堆積岩類等を源岩とする、御在所変成岩類、竹貫変成岩類などの、変成岩がみられる。

未固結堆積物としては、図葉内の各地域を流れる河川の河筋にそって、ごくせまい範囲に発達する、現河床および氾濫原堆積物や、谷底低地を埋めその表層部を形成する、完新世の時期の低地堆積物のほか、発達地域は散在的だが、谷底低地を埋めたタイプと、山麓や河川ぞいに発達したタイプとがみられる低位段丘堆積物、低平な丘陵地ともいえる、台地の一部に発達する中位段丘堆積物などの、更新世の時期の堆積物が発達する。

残丘状に聳える山体の山麓地域には、崩壊性の堆積物が発達する、完新世の時期の堆積物と、更新世の時期の堆積物とがある。

図葉の南東部の差塩地域には、湿原性の堆積物の発達がみられる。

これらのなかで特筆すべきことは、図葉南東部の差塩地域に、阿武隈高地域一帯の、後期更新世の地史を示す典型的な堆積物の姿が、完新世の時期の湿原性堆積物とともに残されていることである。

図葉北東縁部には、北側の「常葉」図葉からの延長としての、固結堆積物である滝根層群が発達している。そのなかのA層にあたるとみられる石灰岩は、層位的な位置を東側に大きくずらして発達する。

深成岩類は、地域のほぼ全域に発達しているが、その大半の地域には、花崗岩質の岩石が発達している。岩相のうえから3つに区別される。また、そのなかで、残丘状にそびえる矢大臣山などのいくつかの山頂部には、斑糲岩質岩石が、小範囲に発達している。

図葉南側のほぼ中央部にあたる、いわき市上三坂地区から北北西の地域にかけてと、図葉南西隅の地域には、いわゆる御在所変成岩類のほか、竹貫変

成岩類の一部が発達している。

未固結堆積物のほとんどは、ほぼ水平な状態に堆積するが、崩壊性の堆積物は、低地側に緩く傾いた状態で発達している。

固結堆積物は、ほぼ南北方向の走向で、みかけ状、東側に傾く状態で発達している。変成岩類の片理の走向は、北北西～南南東方向、および、北西～南東方をとる。

本図葉の地域には、地下資源として、鉄鉱石のほか、石灰岩、石材、鉱・温泉、また、地下水などの水資源等が、量的には多くを望めないが存在する。

一方、谷底低地の一部には軟弱地盤の存在することや、山麓地では、気象条件によっては、土石流の発生の危険もみられること、また、花崗岩質岩石の発達地域では、その風化の程度により差はあるが、土地改変の条件によっては、土砂災害等が予想される。

## 2. 社会・経済的条件

本図幅は、福島県のほぼ中央、阿武隈山系の山間丘陵地にあつて、中通り地方に属する地域と浜通り地方に属する地域とで構成されている。中通り地方は更に県北・県中及び県南に区分されるが、本図幅は大部分が県中地域に属し、少しの浜通り地方（川内村・いわき市）で構成されており、浜通り地方を除く各市町村の生活経済圏は、郡山市及び須賀川市を中心としている。

交通網のうち、鉄道はJR東日本(株)の郡山駅を起点とし、本図幅上辺中央部より入って南下し、緩やかに曲折しながら右辺下方部を出たのちに浜通り地方南端にある県内最大の都市いわき市のいわき駅（平成6年12月に「平」駅から改称）まで結ぶ磐越東線が一条あるのみである。

高速交通体系は、新潟市といわき市を結ぶ磐越自動車道が計画され、河沼郡会津坂下町（会津坂下I・C）～いわき市（いわきJ・C・T）はすでに供用を開始、これにより福島県は縦横に連絡することになった。図幅内では1カ所、小野インターチェンジがあり、途中東北自動車道の郡山ジャンクションを経由して首都圏との距離は大幅に短縮された。

また、本図幅の左辺方向須賀川市及び玉川村には平成5年3月に福島空港が開設され、季節路線を含めて7路線(平成8年7月現在)が運行しており、これとアクセスするトライアングルハイウエーも着手し、平成12年度には一部開通の予定である。

主要な道路では、国道49号線が左辺上部から下辺右寄りに斜走し、これと斜交するように国道349号線が南北に走っている。

その他の道路では、主要地方道が437kmと一般県道が707kmあって、更に市町村道(9,071km)及び農道もそれぞれ整備が行われている。

なお、道路の整備状況は第4表のとおりである。

第4表 道路整備状況

(単位：km、%)

区分	国			道			県						道			市町村			道
	直轄		管	理		主要	地方		一		般		市		町		村		
	実延長	改良済		実延長	改良済		実延長	改良済	実延長	改良済	実延長	改良済	実延長	改良済	実延長	改良済		実延長	
福島県全体	468.2	100.0	100.0	1.261.9	79.0	95.7	1.527.0	79.5	94.6	2.513.2	61.0	91.0	31.270.8	43.8	50.3				
郡山市	77.0	100.0	100.0	22.6	84.8	90.7	133.5	93.7	98.2	183.4	71.5	93.6	3.512.8	40.0	48.2				
いわき市	96.9	100.0	100.0	71.2	61.4	96.3	205.4	85.3	94.4	272.2	66.6	91.2	3.357.8	49.7	53.7				
須賀川市	7.7	100.0	100.0	5.8	100.0	100.0	14.4	94.8	100.0	82.0	72.5	99.8	856.1	44.9	53.2				
石川町				10.2	100.0	100.0	24.0	98.3	100.0	42.2	59.3	96.4	389.5	42.1	46.2				
玉川村				7.6	100.0	100.0	1.2	100.0	100.0	26.4	55.8	96.3	184.1	51.9	55.2				
平田村	10.0	100.0	100.0	4.0	93.7	100.0	9.2	100.0	100.0	20.4	95.4	100.0	267.7	30.0	31.2				
小野町				17.3	100.0	100.0	20.0	95.5	100.0	29.7	81.0	97.6	204.7	57.1	60.1				
滝根町				17.7	87.3	98.5	12.1	27.9	80.3	29.7	63.2	91.1	175.0	29.5	51.2				
川内村				17.5	74.2	99.0	17.6	80.8	100.0	20.5	34.0	70.8	123.7	28.2	40.2				
計	191.6			173.9			437.4			706.5			9,071.4						

(注<sup>1</sup>) 国道・県道は「国県道現況調査(平成4年4月1日現在)」により、市町村道は「福島県勢要覧(1995)」から作成。  
 (注<sup>2</sup>) 延長は市町村内延長であり図幅内には限定しない。



## IV 主要産業の概要

最近の産業別就業者数の動向（第5表参照）を見ると、県全体では4.0%の増加があるのに対して人口の伸びは1.2%に止まっている。

この差は、年少人口（0～14才）の減少が主な要因であり、高齢化社会の一端をみることができる。

また、調査地域の産業別就業者数は7.8%の増加で、県平均を大きく上回るものの郡山市及びいわき市の増加が著しいため、市部を除く（6町村）とむしろ1.7%の減少であり、就業者が都市部へ集中する傾向を見ることができる。

産業別構成では、いずれの市町村においても第1次産業が大幅に減少し、第2次・第3次産業への移行が伺われる。

### 1. 農 林 業

#### (1) 農 業

本県の農業は、農用地の減少、労働力の流失、高齢化など生産環境の悪化が余儀なくされている。

昭和59年度をベースとしたその後の推移を見ると、総世帯数では567,780戸に対して645,116戸と13.6%の伸びであるのに比べ、農家戸数では146,238戸に対して129,744戸と11.3%も減少し、農家人口もまた789,892人に対して648,918人と17.8%もの大幅な減少となり、労働力の流失傾向を見てとれる。（第6表参照）

耕地面積では、県全体の減少率が-8.2%であるのに対し、調査地域では-10.0%と高い減少率を示しているが、特にいわき市が-16.2%と高い値であることの影響である。

また、農業粗生産額では平成3,500億円程度を堅持していたものが、平成5年度は2,980億円（福島県農林水産統計年報）と大幅に減少した。こ

れは、この夏、東北地方が戦後最大級の冷害に見まわれたため、本県の作況指数は61.10 a 当りの収穫量は313kgに止まった。結局、全国で2,545千トンもの外国輸入米に頼らざるを得なかった。

平成6年度は、平年並の3,531億円にまで回復している。(第7表参照)

本調査地域は、阿武隈高地の中にあつて水稻を主とし、畜産、養蚕及び工芸作物としての葉タバコを生産している。中でも養蚕は、本県が繭生産量で全国第2位(平成6年度において、全国で77百t、福島県では13百t)を誇っているが、最近の外国産輸入品との競合から年々減少し、平成2年の58百tを最高に、現在では2割台になってしまった。

農業基盤整備のうち、耕地のは場整備状況は、県全体では新旧制度を含めて65.6%であるが、本調査地域では51.8%と下回っている。水田だけを見ると県平均の76.7%に対して58.1%と大きな差のあることが分る。(第8表参照)

(注<sup>1</sup>) 文中で昭和59年の数値は「福島県勢要覧(1984)」によつた。

(注<sup>2</sup>) 新制度とは、1枚30a以上の整備制度を言う。

## (2) 林 業

福島県の林野面積は県土の69%を占め、本調査地域では更にその19%で179,566haに達する。本調査地域では、人工林の育成が進み、県平均の36.9%に比べて56.3%と高い値を示している。気候、土壤等の立地条件が有用樹種の生育に適しているものと思われるが、近年は労働力の流失、賃金・資材の高騰による生産費の増大、木材需要の減少及び外材の圧迫による木材価格の低迷が長期化していることなどから、林業経営は非常に厳しいものになっている。(第9表参照)

## 2. 商・工業

社会基盤の整備がすすむにつれて経済活動はますます盛んとなり、県全体での昭和59年との比較では、製造品出荷額で179%、年間販売額では150%と

伸びが著しい。

本調査地域においては、製造品出荷額で3市の伸びは172%で県全体とはほぼ同率だが、町村部の伸びは229%と大きく上まわる。

また年間販売額では163%の伸びであり県全体の150%をわずかに上まわるが、3市の伸率164%に比べて町村部で123%と鈍化する。町村部の市部に占める割合は17.9%に止まっている。

このことから商工業においても都市部への集中化傾向を見てとれるが、事業所数及び製造品出荷額共町村部の大幅な伸びが顕著である。

福島県勢要覧によれば、平成7年度の調査地域における事業所数2,554（昭和59年2,395）、製造品出荷額1,915,404百万円（同1,094,022百万円）、及び商店数12,836戸（同13,814戸）、年間販売額3,056,360百万円（同1,870,198百万円）である。（第10表参照）

### 3. 観 光

本地域は、大滝根山を中核とする阿武隈中部高原県立自然公園の一部にかかり、高柴山、五十人山等の軽登山やハイキング、釣り等のレクリエーションを楽しむことができる。

第5表 産業別就業者数

(単位：人、%)

区分 市町村名	総数		第1次産業		第2次産業		第3次産業		備考
	昭和59年	平成7年	昭和59年	平成7年	昭和59年	平成7年	昭和59年	平成7年	
福島県全体	1,027,123	1,067,909	(22.2) 227,744	(14.2) 151,443	(32.2) 330,978	(36.7) 392,124	(45.6) 467,857	(49.0) 523,179	
郡山市	138,888	155,759	(15.0) 20,881	(9.0) 13,986	(27.6) 38,365	(29.8) 46,417	(57.3) 79,552	(60.9) 94,871	
いわき市	159,881	170,191	(10.4) 16,588	(6.4) 10,854	(36.8) 58,889	(39.6) 67,312	(52.7) 84,332	(54.0) 91,861	
須賀川市	29,680	31,364	(25.1) 7,457	(17.1) 5,358	(34.8) 10,314	(38.1) 11,958	(40.1) 11,903	(44.8) 14,046	
石川町	11,336	11,174	(30.3) 3,439	(17.7) 1,981	(31.2) 3,541	(41.7) 4,654	(38.4) 4,351	(40.6) 4,538	
玉川村	4,265	4,199	(45.0) 1,918	(26.9) 1,130	(34.7) 1,480	(45.7) 1,917	(20.3) 865	(27.4) 1,149	
平田村	4,848	4,781	(57.4) 2,782	(39.1) 1,867	(23.8) 1,152	(38.2) 1,824	(18.9) 914	(22.7) 1,089	
小野町	7,441	7,230	(38.8) 2,888	(24.3) 1,758	(28.0) 2,085	(41.0) 2,967	(33.1) 2,465	(34.5) 2,493	
滝根町	3,035	3,046	(34.8) 1,056	(24.7) 751	(32.3) 980	(43.1) 1,312	(32.5) 986	(32.1) 979	
川内村	2,208	2,148	(36.3) 802	(29.7) 639	(35.4) 781	(38.7) 831	(28.2) 623	(31.6) 678	
計	361,582	389,892	(16.0) 57,811	(9.8) 38,324	(32.5) 117,587	(35.7) 139,192	(51.4) 185,991	(54.3) 211,704	

(注1) 福島県勢要覧(1984、1995)により作成。

(注2) 上段( )内数字は、総量に対する割合を表す。

第6表 農家戸数及び耕地面積

(単位：戸、人、ha)

市町村名	総世帯数	農家数			農家人口	経営耕地面積						
		総数	専業農家数	1種兼業農家数		2種兼業農家数	総数	田	畑	うち牧草地	樹園地	
福島県全体	645,116	129,744	20.1	12,089	21,598	96,057	648,918	156,012	106,598	33,602	3,220	15,812
郡山市	108,242	11,126	10.3	959	2,041	8,126	57,256	13,718	10,500	2,417	101	801
いわき市	117,069	11,007	9.4	845	831	9,331	52,055	8,292	6,369	1,749	68	173
須賀川市	17,933	3,323	18.5	432	660	2,231	18,166	4,872	3,314	914	24	643
石川町	5,480	1,868	34.1	135	195	1,538	9,766	2,163	1,199	813	72	151
玉川村	1,741	951	54.6	37	125	789	5,332	1,007	542	428	13	37
平田村	1,914	1,239	64.7	100	343	796	6,368	1,504	874	620	122	10
小野町	3,508	1,264	36.0	91	313	860	6,481	1,436	803	616	77	17
滝根町	1,348	578	42.9	46	136	396	3,072	625	308	314	76	3
川内村	1,029	536	52.1	41	133	362	2,492	730	465	242	112	22
計	258,264	31,892	12.3	2,686	4,777	24,429	160,988	34,347	24,374	8,113	665	1,857

(注1) 福島県勢要覧(1995)により作成。

(注2) 農家率は、農家総数を総世帯数で除した値である。

第7表 農業粗生産額

(単位：百万円)

区分 市町村名	農業粗生産額														
	合計	耕種					養蚕	畜産							
		計	米	麦 雑穀 豆類	いも類 及 野菜	果実 花卉		その他	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他	加工 農産物
福島県全体	353,130	289,000	165,060	1,860	64,160	41,950	15,990	2,120	61,850	15,880	12,660	15,260	17,750	320	160
郡山市	27,595	24,069	17,145	155	5,001	916	852	190	3,336	1,066	1,084	629	551	6	-
いわき市	17,700	14,568	8,858	48	4,385	1,049	228	8	3,124	991	570	602	951	10	-
須賀川市	12,549	11,795	5,135	29	4,223	2,239	169	70	684	262	53	366	3	-	-
石川町	4,844	3,512	1,842	55	910	226	479	19	1,313	459	296	56	502	-	-
玉川村	3,412	1,902	864	22	926	52	38	-	1,510	141	23	525	821	-	-
平田村	5,753	2,184	1,140	20	349	37	638	-	3,569	511	313	137	2,608	-	-
小野町	3,118	2,253	1,137	15	438	25	638	4	861	332	529	-	-	-	-
滝根町	1,507	1,008	413	6	286	6	297	-	499	208	284	-	7	-	-
川内村	1,572	873	575	7	103	8	180	3	696	84	97	208	307	-	-
計	78,050	62,164	37,109	357	16,621	4,568	3,519	294	15,592	4,054	3,249	2,523	5,750	16	-

(注) 福島県農林水産統計年報 (東北農政局福島統計情報事務所・平成6～7年版) により作成。

第8表 耕地のほ場整備状況

(単位：km<sup>2</sup>、ha)

区分	市町村面積 (km <sup>2</sup> )	耕地 面積 (ha)	ほ 場 整 備 状 況												備考		
			合計 (ha)						畑								
			整 備 済 面 積			未 整 備 面 積			整 備 済 面 積			未 整 備 面 積					
			率	うち 新制度	率	率	うち 新制度	率	率	うち 新制度	率	率	うち 新制度	率			
市町村名																	
福島県全体	13,781.82	162,248	106,378	65.6	87,499	76.7	65,943	57.8	26,578	23.3	18,879	30.2	16,165	33.6	29,292	60.8	
郡山市	731.05	14,795	8,064	34.5	6,357	33.8	6,297	33.2	5,043	44.2	1,707	30.3	1,706	30.2	1,688	39.7	
いわき市	1,231.04	9,254	5,213	36.3	4,806	68.6	2,078	29.6	2,204	31.4	407	18.1	295	13.2	1,837	81.9	
須賀川市	154.98	5,211	2,187	42.0	1,462	40.2	1,044	33.7	2,178	59.8	725	46.2	708	45.1	846	53.8	
石川町	115.75	2,505	1,128	45.0	713	52.0	406	29.6	657	48.0	415	36.6	402	33.4	720	63.4	
玉川村	46.56	1,228	814	66.3	475	79.7	295	49.5	121	20.3	339	33.6	216	31.2	293	46.4	
平田村	93.53	1,718	427	24.9	388	42.5	241	36.4	526	57.5	39	4.9	33	4.1	765	95.1	
小野町	125.11	1,694	800	47.2	642	68.4	408	44.1	283	30.6	158	20.5	149	19.4	611	79.5	
滝根町	50.70	602	395	65.6	349	100.0	183	32.7	—	—	46	18.0	36	14.1	209	82.0	
川内村	197.38	717	520	72.5	337	63.0	109	30.4	198	37.0	183	100.0	183	100.0	—	—	
計	2,746.10	37,724	19,548	51.8	15,529	38.1	11,061	41.4	11,210	41.9	4,019	36.6	3,728	33.9	6,969	63.4	

(注1) 平成7年度管内別ほ場整備率一覧表(農地建設課)により作成。

(注2) 新制度とは、1区画30a以上に整備する制度をいう。

第9表 林業の概要

(単位：km<sup>2</sup>、ha)

区分 市町村名	市町村 面積 (km <sup>2</sup> )	林野総面積 (ha)				林種別森林計画面積 (ha)										
		合計	国有林 (計)	民有林保有形態別面積			合計	人工林			天然林					
				計	市町村	財産区		公社	私有	針葉樹	広葉樹	計	針葉樹	広葉樹	計	
福島県全体	13,781.82	952,575	380,045	572,530	11,462	38,363	24,288	30,174	468,243	921,330	329,410	10,597	340,007	65,708	515,615	581,323
郡山市	731.05	40,371	10,158	30,213	258	485	4,075	4,055	21,340	38,981	17,729	425	18,154	2,897	17,930	20,827
いわき市	1,231.04	90,755	30,364	60,391	1,799	1,338	1,819	568	54,867	87,573	51,773	1,328	53,101	4,515	29,957	34,472
須賀川市	154.98	4,802	606	4,196	29	58	229	-	3,880	4,596	1,393	40	1,433	999	2,164	3,163
石川町	115.75	5,801	-	5,801	157	7	136	-	5,501	5,626	2,656	7	2,663	235	2,728	2,963
玉川村	46.56	2,271	669	1,602	-	81	-	-	1,521	2,172	672	1	673	688	811	1,499
平田村	93.53	6,004	1,331	4,673	19	31	9	-	4,614	5,731	2,941	23	2,964	427	2,340	2,767
小野町	125.11	8,870	968	7,902	204	165	-	29	7,504	8,726	4,851	55	4,906	68	3,752	3,820
滝根町	50.70	3,659	1,074	2,585	31	226	-	7	2,321	3,505	2,338	55	2,393	59	1,063	1,112
川内村	197.38	17,033	5,556	11,477	1,059	5,543	-	1,557	3,318	16,808	11,329	210	11,539	1,146	4,123	5,269
計	2,746.10	179,566	50,726	128,840	3,556	7,934	6,268	6,216	104,866	173,718	95,682	2,144	97,826	11,034	64,858	75,892

(注) 福島県農林水産統計年報(東北農政局福島統計情報事務所・平成6～7年版)により作成。



第10表 工業・商業統計表

(単位：人、百万円)

市町村名	区分		工業			商業			商 業				備考
	事業所数	従業者数	従業者数	製造品出荷額	総数	卸売業	小売業	従業者数	年間販売額				
福島県全体	7,680	233,926		4,806,858	33,864	6,204	27,660	175,389	6,227,167				
郡山市	908	27,110		756,252	5,472	1,745	3,727	37,104	1,897,677				
いわき市	1,124	35,234		820,178	5,456	936	4,520	29,353	977,477				
須賀川市	227	8,297		204,444	948	158	790	5,108	127,345				
石川町	106	2,743		41,740	390	40	350	1,546	25,134				
玉川村	38	1,303		15,909	86	5	81	273	5,054				
平田村	41	927		10,575	93	3	90	252	3,732				
小野町	67	2,089		58,704	246	19	227	1,022	15,171				
滝根町	30	629		6,125	78	8	70	216	3,378				
川内村	13	277		1,477	67	—	67	137	1,387				
計	2,554	78,609		1,915,404	12,836	2,914	9,922	75,011	3,056,355				

(注) 福島県勢要覧(1995)より作成。

福島県土地分類基本調査：小野新町

# 各 論

# I 地形調査

## 1. 地形分類

### § 1. 地形の分類

#### (1) 山地・丘陵地

- ① 山頂緩斜面 (mT) …隆起準平原とされる阿武隈山地においては、山頂・丘陵頂に分布する小起伏面・緩斜面群は、その高度頻度の特徴から、I面 (900~1,100m)、II面 (600~700m)、III面 (300~500m) に分けられる (中村1960、木村1994)。本図葉域は、阿武隈山地のほぼ中央部を収めている関係で、上記 I・II面を示す地形面がいたるところにひろがっている。地形分類図で山頂緩斜面として分類されたもののうち、ほぼ標高800mを超えるものはすべて I面、600m台のものは II面に属するものとみてよい。前者は、II面のレベルの上に突出する残丘であり、II面のレベルに向ってなだらかな裾野を引くピラミッド型の特徴をもつものが多い。蓬田岳、矢大臣山はじめ、日影山、羽山、万太郎山、鬼ヶ城山などがそれである。II面に相当するものは一本山毛櫛周辺のほか、いわき市差塩地区、平田村下蓬田地区に比較的連続性のよい緩斜面として分布している。
- ② 山腹緩斜面 (mF) …標高900m前後の主峰のまわりにひろがる場合 (万太郎山周辺) と、主峰から四方へ放射状にのびる山稜が高度をさげる途中に肩状にひろがる場合 (矢大臣山南斜面、蓬田岳南西方など) に認められる。後者は II面に相当するものである。
- ③ 山麓緩斜面 (mP) …上記山頂緩斜面を残す残丘群の多くが山麓に幅数百m、長さ3~4kmの緩斜面を伴っている。蓬田岳、日影山、羽山、矢大臣山、鬼ヶ城山の、いずれも広い谷に面する側の斜面の裾に典型的に発達する。斜面上方から供給された岩屑に薄く覆われるものの、もと

もとは侵蝕性の緩斜面がつくられていて、そこに岩層が広く散らばったものと思われる。その侵蝕性緩斜面は、隆起準平原Ⅲ面（主要部は阿武隈山地西縁—本図葉域外—にひろがる）の、山地内への拡大の前線あるいはさがけにあたるものと考えられる。そのほか、これとは成因は異なるが、丘陵地内部に細かく刻み込んだ谷の谷頭部にも若干認められる。

- ④ 丘陵 (H) …ここにいう丘陵は、広義の丘陵地を意味するのではなく、丘陵地や盆地の中にあつて周囲を谷底平野などに囲まれて孤立丘となっているものを指す。蛇行発達や河川争奪の結果生じる環流丘陵 (Umlaufberg) である場合が多い。小野町沼ノ平、上羽出庭、いわき市差塩、平田村橋本などがその例である。
- ⑤ 一般斜面 (G) …全域が山地・丘陵地に含まれる本図葉域にあつては、ある程度の面積をもつ各種地形面を除く地表のほとんどすべてが一般斜面であり、いわば本図葉の下地をなしているともいえる。さまざまな形状を不規則にかかえこむ一般斜面のひろがりのなかでも注目されるのは、ほぼ標高600m台を中心として、500~700mにわたって認められる定高性山稜の存在である。前記Ⅱ面相当のmT、mFとは異なり、Ⅱ面の原地形面そのものではないが、いくらかの高低差をもちながらも、図葉域一杯に、ほどよい連続性を保ちつつ連なる様子は、まさに隆起準平原Ⅱ面生成当時（周縁部にⅢ面が形成される以前、第三紀鮮新世頃）の小起伏地の姿を十分に推測させるものである。
- ⑥ 急斜面 (St) …傾斜区分図に示される傾斜30度以上の部分のうち、とくに広い範囲にわたって連なるところを選んだ。成因的には二つに分けられる。すなわち、標高900m級残丘群（前記mT）山頂直下の急斜面部と、夏井川ならびに北須川の峡谷部とである。蓬田岳、矢大臣山、羽山、万太郎山の山腹斜面のStは、以前はもっと広くひろがっていたⅠ面が、Ⅱ面を基準面として削り去られる過程で形成されたものであり、後者は阿武隈山地の最後の大規模な隆起運動（第四紀初め頃）に続く河川の侵蝕復活の結果を生じたものである。

## (2) 台地・段丘

阿武隈山地のほぼ中央部に位置する関係で台地・段丘をつくり出すに足る広い谷底をもった河谷の発達する条件に乏しいこの地域には、5万分の1のスケールでわかり易く表示できるほどの河成段丘面の分布はほとんどみられない。逆に、無数の小支谷群の多くに、1～2段程度の段丘地形が断片的にみられるのが一般的である。

- ① 上位砂礫段丘 (Gt I<sup>+</sup>, Gt I) …標式的な段丘ではないが、北須川上流の一支流の谷頭、小網木付近に、いわゆる高位谷 (中村1985) の形で Gt I<sup>+</sup>, Gt I の両者があい接して分布する。また、羽山の北麓、入新田の北にみられる Gt I は、古い土石流扇状地が開析されて段丘化したものらしい。
- ② 中位砂礫段丘 (Gt II) …丘陵地内で、低い鞍部や幅広い稜線上にひろがる平坦地と、開析谷の最奥部に、谷底面である下位砂礫段丘より一段高位にみられる平坦地とがこれに該当する。主として北須川および平田川流域の小起伏地 (次節 II b、II c) に多く認められる。
- ③ 下位砂礫段丘 (Gt III) …丘陵斜面の下端と谷底平野 V<sub>p</sub> との間にはさまるようにしばしば Gt III が分布する。小支谷の谷底面が、より高次の支谷の谷底 (多くは V<sub>p</sub>) に対して不協和合流する場合、小支谷底を下位砂礫段丘と表示することが多い。特定の例をあげるまでもなく、ほとんど図葉内全域にこれがみられる。もうひとつは、主要河川の顕著な遷移点を境に、下流側の谷底平野と区別するためにその上流側を Gt III としたところも少なくない。平田村上蓬田地区、滝根町神俣地区などがそれである。

## (3) 低地

河原 (R<sub>b</sub>) は夏井川の河床のごく一部にしかみられないので説明は省き、図葉域内に万遍なく発達する谷底平野 (V<sub>p</sub>) について述べる。水系網が十分に発達した山地・丘陵地においては、地質構造や岩石の侵蝕抵抗差などに適応した水系模様 (drainage pattern) が形成されるのが普通である。

本地域にあっては、花崗岩類を主とする地質構成を反映して樹枝状水系を発達させる河谷が多いが、とくに夏井川および北須川の各上流部では、水系の北北西—南南東方向のlinearmentが目立つので同方向の何らかの地質構造上の制約が推定される。さらに、谷底平野の発達はいずれの水系のいずれも上流域において著しく、遷移点より下流にはほとんどみられないことから、浜通り低地並びに中通り低地をそれぞれ局地的基準面とする新期の侵蝕復活の影響が、この地域まで未だ及んでいないことがわかる。つまり、本図葉域の中心部は、山地周縁低地からは独立に、高位の基準面(約400m)をベースとして地形発達を続けてきたと考えられるのである。

#### (4) そ の 他

- ① 土石流地形 (Df) …蓬田岳南斜面と、一盃山南斜面にかなり広く土石流堆積物のひろがる斜面がみられる。前者は、山麓に押し出した岩層が広い谷底に扇形に撒き散らされた形であり、後者は狭い谷底を岩層が埋積するタイプとなっている。後者の例は、図示できないほどの小規模なもの(斜面崩壊、山崩れなど)が小支谷沿いに多数形成されている可能性が高い。
- ② 麓層面 (Cs) …「常葉」図幅と同様に、花崗岩丘陵の小支谷沿いに多数分布する(中村・高橋1995)。マサ滞留の条件を欠く大起伏・急傾斜の山地にはほとんどみられない。
- ③ 遷移点…夏井川の本・支流の、河床高度400m付近にあるものと、北須川の同じく450m付近のものとは、それらの上流側に谷底平野を広く発達させ、小起伏地の維持・発達を保障している点でその存在意義は極めて大きい。それらよりさらに上流側にも小規模な遷移点がいくつかあって、それぞれの小支谷内に局地的侵蝕基準面の役割を果たしている。

## § 2. 地形地域の区分

各種地形面分布の地域的なまとまりをもとに、以下15の地形地域(地形区)を設定した。説明の便宜上、Ⅰ山地、Ⅱ小起伏地、Ⅲ盆地、Ⅳ峡谷部とし、

Ⅳ以外をそれぞれいくつかに細区分した。なお、ここにいう盆地は、福島盆地などの大盆地ではなく、谷底平野が細長く続くような山間の、あるいは谷間の平坦地を対象としている。なお、特異な地形単位として差塩湿原についても言及する。

### (1) 山 地

阿武隈山地の主分水界は図葉西半を南北に走るが、その一部を構成する一盃山(855.8m)と、西方の二ツ石山(742.8m)、東方の日影山(879.3m)をまとめて日影山地Ⅰaとした。蓬田岳山地Ⅰbも、孤立峰の蓬田岳(952.2m)のほか、南西に低い鞍部を経て連なる867m峰、845.8m峰、794m峰などを含む。羽山・万太郎山地Ⅰc、矢大臣山・鬼ヶ城山地Ⅰdも、それぞれ約4km隔った2つの山峰をまとめたものである。それぞれが孤立峰であるのは、遠隔残丘(Fernling)の特徴のひとつである。以上がⅠ面の原面を残しているのに対して、一本山毛櫨山地Ⅰeは、その標高(667.6m)からみてⅡ面を示すものであり、同山地内の山頂緩斜面からの高さが630~670mにあるのもこれと一致する。

### (2) 小 起 伏 地

興味深いのは、小野町南部小起伏地Ⅱbと北須川流域小起伏地Ⅱcとが接する分水界の地形である。この流域界は町村界とは一致せず、平田村沢目木の谷の谷底(下位砂礫段丘)上にあり、ここから北約5kmにわたって、夏井川流域が平田村に含まれることになる。谷底平野を伴う支谷群がからみあうように複雑に分布しているのもこの小起伏地に特徴的である。

### (3) 盆 地

小野町中心部が立地する夏井川上流盆地Ⅲaが典型的な谷底平野型盆地であるとすれば、三坂川流域Ⅲb、小白井Ⅲc、桶壳Ⅲd、差塩Ⅲeはいずれもその小型版である。規模の相違はあっても、谷底平野をつくり出した河川の、いずれも上流部にひろがることと、その下流側に顕著な遷移点があって盆地がそこで閉じていることが共通点である。阿武隈山地中央部には、本図葉域以外の各地に同様の山間小盆地が沢山あるが、それも隆起準平原

という地形的環境ゆえに形成されたものである。

#### (4) 峡谷部Ⅳ

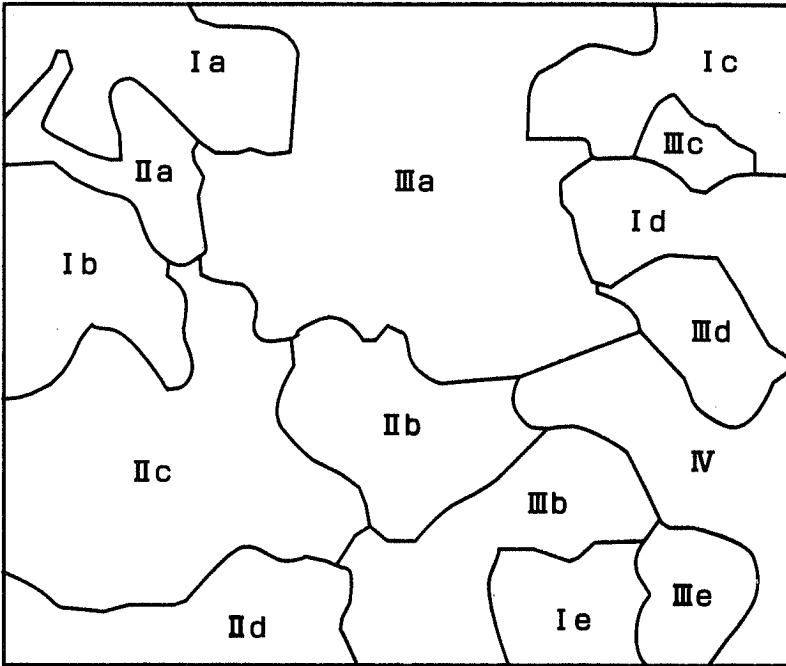
北須川中流部にも小規模ながら夏井川のそれに成因上共通する峡谷があつて母畑湖などがつくられているが、ここでは夏井川の峡谷部のみをひとつの地形区とした。阿武隈山地を深く刻む夏井川は、遷移点から下流では起伏量200mほどのV字谷を穿ち、傾斜30度以上の急斜面も一部につくり出している。全体として山地解体の過程の一端を担っているわけである。

#### (5) 差塩湿原について

図葉域南西部、いわき市<sup>みか</sup>三和町差塩にある約1haの小規模な湿原で、標高480mの谷底平野の一角にひろがる。排水河川は、この谷底平野を主体とする差塩盆地の南端から図葉外を南東方に流下する児玉川（夏井川右岸支流）である。盆地尻の川下の下流、磐越自動車道の差塩パーキングエリア付近に遷移点があつて、これを局部的侵蝕基準面として谷幅が拡大するとともに埋積が進行して盆地床（谷底平野）が形成されたものと思われる。また、湿原の北500mほどのところに低い谷中分水界（485m）があり、そこから北側は夏井川の一支流の谷頭部となっている。この部分（堀添の北側）は、同支流の遷移点より上流部で河床勾配も、小玉川上流域（差塩湿原を含む盆地床）とほとんど変わらぬほどゆるやかではあるが、基本的には、夏井川の谷底（310m）を基準面とする同支流が、小玉川流域に食い込んだ最先端にあたり、遠い将来、遷移点の後退がさらに進めば夏井川（右岸小支流）と小玉川との間で河川争奪が行われるものと思われる。なお、差塩湿原はいわき市指定天然記念物であり、湿地性の植物群落の中にはミツガシワ（三ツ櫛；リンドウ科の多年草。やや冷たい水沢・池沼に生じ、高さ30cm、葉は3小葉からなる複葉。春、根茎から花茎を出し、多くの五弁の白花を総状につける。『広辞苑』）などがみられる。



地形地域区分図



- I a 日影山地      I b 蓬田岳山地      I c 羽山・万太郎山地  
I d 矢大臣山・鬼ヶ城山地      I e 一本山毛櫨山地  
II a 谷田川流域小起伏地      II b 小野町南部小起伏地  
II c 北須川流域小起伏地      II d 平田川流域小起伏地  
III a 夏井川上流盆地      III b 三坂川流域盆地      III c 小白井盆地  
III d 桶壳盆地      III e 差塩盆地  
IV 夏井川峡谷部

## 参 考 文 献

- 木村和雄 (1994) : 阿武隈高地北部の侵食小起伏面と後期新生代地形発達史  
季刊地理学 46-1 1-18
- 中村嘉男 (1960) : 阿武隈隆起準平原北部の地形発達 東北地理 12-3 62  
-70
- 中村嘉男 (1985) : 分水界近傍の地形的特性と高位谷の形成について 福島  
大学教育学部論集 38 (社会科学) 1-6
- 中村嘉男・高橋正之 (1995) : 5万分の1地形分類図「常葉」および同説明  
書 福島県

注：地形分類図作成にあたっては、図葉域北西部（須賀川市、郡山市、小野町・平田村の北部）を高橋が担当し、他の地域および全体の調整を中村が担当した。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）  
（福島市立三河台小学校教諭 高橋正之）

## 2. 傾斜区分

地表面はいうまでもなく基本的には曲面の集合であるが、そこでの傾斜度を平面上に図示する必要上、その曲面を細かな平面におきかえ、各平面部分の最大勾配をもってその地点ないし地形面の傾斜とするという手続きをとる。また、オーバーレイの本図と、地形分類図とを見くらべてみると、両者に示された各ユニットの分布パターンがよく類似しているものとそうでないものがあることがわかる。谷底平野と下位砂礫段丘のところがほぼ傾斜3度以下ないし3度以上8度未満と一致し、山頂・山腹・山麓緩斜面が大体8度以上15度未満または15度以下20度未満のところと重なるようである。一般に、緩急の程度とは関係なく谷密度が低く、ひと続きの地形面が広く存在するところは地形面の平均傾斜が地形面のユニットごとによく表されているのに対して、谷密度が高く、等高線の出入りが細かいところは、包括的な値で括られている。その意味で、一般斜面（本図葉域で最大の面積を占める）が、傾斜30度以上40度未満のランクから8度以上15度未満のランクに至るまでさまざまな階級にわたることになるのもやむを得ない。以下各ランクごとに説明する。

### (1) 傾斜40度以上

図葉南東部、夏井川が阿武隈山地を深く刻む部分、具体的には谷壁斜面の一部にみられる。山地が縁辺部から開析され次第に解体の過程を経るのは、隆起準平原のいわば宿命ともいえるが、少なくとも本図葉域が、侵蝕基準面たる太平洋と阿武隈川縦谷の谷底から遠隔の地にあたる山地中央部に位置するため、開析谷による谷壁急斜面の形成もこの程度のひろがりには収まっているといえるのである。

### (2) 傾斜30度以上40度未満

成因的に3つのケースがある。まず第一に、上記40度以上の斜面と同様、山地を深く開析する谷の谷壁斜面で、図葉南東部の夏井川の谷沿いと、南西部の北須川の谷沿いとにみられる。この種の急斜面の分布がいずれも顕

著な遷移点よりも下流側に限られるのが注目される。

次に、図葉域内に点在する残丘群の山腹斜面がある。とくに蓬田岳、矢大臣山、羽山においては、山頂緩斜面のまわりに30度以上の急斜面、その下方に30度未満、さらに20度未満と、次第に緩傾斜の部分が同心円状に分布する様子を読みとられる。山頂を切りとられたピラミッド、しかもなだらかに裾野をひろげるといふ残丘の特徴がよく表現されている。

もうひとつは、一般斜面の一部にあるとくに急傾斜の部分で、これは古い時代の斜面崩壊のあとではないかと推定される。

### (3) 傾斜20度以上30度未満

地形分類図における一般斜面の約7割がこのランクの傾斜度で占められているといえよう。傾斜区分図の基調となつているともいえる。もちろんこの勾配をもつひと続きの滑らかな地表面はごく一部（蓬田岳、日影山、矢大臣山の山腹斜面など）に過ぎず、大半は細かく開析された山腹あるいは丘陵斜面の包括的な勾配が示されているわけである。従つて、部分的には平坦な段丘面や緩傾斜の麓層面などが随所に含まれるのもやむを得ない。

### (4) 傾斜15度以上20度未満

地形景観上、山地・丘陵地の中に認められる緩傾斜地—なだらかにひろがる山麓や丘の連なりなど—は、ほとんどこの区分の中に収められている。地形のユニットとしては山麓緩斜面がその代表である。また、地形地域区分図に示されている山間小盆地—小白井、桶売、差塩など—の、盆地床をめぐる周縁の斜面のほとんどがこのランクに入る。面積の広い夏井川上流盆地Ⅲaや三坂川流域盆地Ⅲbにおいても、それぞれの地形区内の一般斜面の過半がこのランクの傾斜を示している。なお、やや意外なことにも、大規模な人工改変地の多くが、丘陵地の高低差を利用して階段状の平坦地を作っているため、傾斜区分上はこのランクに相当するところとなる。

### (5) 傾斜8度以上15度未満

この区分以下では農業的土地利用が可能となるので、畑や水田（棚田）

それに集落の分布がにわかにも多くなる。地形的には麓層面、上・中位砂礫段丘がほぼこれに相当する。

(6) 傾斜 3 度以上 8 度未満

小起伏地に無数に発達する支谷群の谷底平野がほぼこのランクに含まれる。地形の形状に従って細長く直線状に 6 km も連続するところ（小野町百目木から永岡に至る十石川の谷）もあるが、多くは長さ 1 ～ 2 km の谷底である。

(7) 傾斜 3 度未満

夏井川をはじめとして、谷田川、北須川、平田川、（夏井川支流の）三坂川の各谷底平野のほとんどすべてが 3 度未満の低平地となっているほか、小白井、差塩の両盆地にも比較的広くこの区分の平坦地が認められる。小野町、滝根町、平田村のそれぞれ中心市街地はいずれもこのランクの平坦性を利用して立地しているといえよう。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）

## Ⅱ 表層地質

### 1. 表層地質

阿武隈高地のほぼ中央の地域にあたる本図葉の範囲には、花崗岩質の岩石が全域にわたってひろく発達している。風化がいちじるしくすすんでおり、地域によっては岩質の区別が容易でないところもあるが、三つに区別される。

図葉中央の地域から北側の地域に分布する、十石山（718.1m）、一盃山（855.8m）、および、矢大臣山（964.7m）の山頂部周辺には、斑礫岩質岩石の発達がみられる。

図葉南部の中央と南西隅の地域には、阿武隈高地の南部の地域に、ひろく発達している変成岩体の一部が、北北西～南南東方向、および、北西～南東方向の方向性をとりながら、小範囲に発達している。緑色片岩類を主とする変成岩類と、黒色片岩や片麻岩などを主とする、変成岩類とに区別できる。

図葉内を、北西側から南東側に向かって流れる、夏井川水系の流域の地域では、神俣、小野新町、および、夏井の各地域に、やや幅のひろい谷底低地が発達するほか、各支谷内にも幅は狭いが、谷底低地が各地に発達している。図葉西側の、谷田川、平田川の水系の谷部にも、各所に同じような低地が発達している。これらの低地内には、各河川ぞいのせまい範囲に、砂礫からなる現河床および氾濫原堆積物、砂泥を主とし、礫をふくむ低地堆積物が発達している。

また、地域は限られるが、低地の縁辺部には、低位段丘堆積物や中位段丘堆積物の発達がみられるところもあり、低位段丘堆積物の中からは、植物化石が産出し、第四紀の寒冷期の堆積物であることが確認されている。

図葉中の各地域に、残丘状に聳える山体の山麓部には、山体斜面の崩壊により供給されたとみられる堆積物が、各所に発達している。その一部は、更新世の時期の降下テフラに覆われており、残丘状の山体では幾度か、山体斜面の崩壊があったことを示している。図葉南東部の一部には、湿原性の堆積

物の発達もみられる。

これらの表層地質には、第11表に示すように、大分類で4、小分類では15に分けられる。

第11表 表層地質区分

大区分	小 区 分	記 号	堆積物・地層・岩石	地 質 時 代	
未固結 堆積物	砂礫	sg	現河床および氾濫原堆積物	完新世	第四紀
	シルト・砂・礫	smg	低地堆積物		
	泥・砂・有機質シルト・礫	msg	低位段丘堆積物	更新世	
	砂・粘土・礫・泥炭	smgp	中位段丘堆積物		
角礫・砂・泥	cl	崩壊堆積物	完新世~更新世		
粘土・シルト・砂	ms	湿原性堆積物			
固 結 堆積物	石灰岩	Ls	A層	先 白 亜 紀	
	頁岩・頁岩~チャート薄互層	Sc	B層 滝根層群		
	頁岩・チャート・緑色岩類	Scg	C層		
深成岩	細粒黒雲母花崗岩・複雲母花崗岩	Gr(I)	花崗岩質岩石(I)	白亜紀	中生代
	灰色黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・	Gr(II)	花崗岩質岩石(II)		
	黒雲母花崗閃緑岩	Gr(III)	花崗岩質岩石(III)		
	角閃石黒雲母花崗閃緑岩 斑禰岩・閃緑岩	Gb	斑禰岩質岩石		
変成岩	緑色片岩・黒色片岩	Gsch	御在所変成岩類	先 白 亜 紀	
	黒色片岩	Bsch	竹貫変成岩類		

(1) 未固結堆積物

未固結堆積物には、図葉内を流れる各河川筋に発達する、現河床堆積物および氾濫原堆積物 (sg)、図葉内の各地域に発達する谷底低地を埋めて、その表層部に広く発達する低地堆積物 (smg)、発達地域はごくかざられているが、谷底低地の縁辺部や夏井川の沿岸の地域に、ごく小規模な発達がみられる低位段丘堆積物 (msg)、谷底低地周縁の丘陵地の一部に、わずかに発達する中位段丘堆積物 (smgp) などがある。

図葉内の西側の地域から北側の地域にかけて、残丘状にそびえる蓬田岳 (952.2m)、一盃山 (855.8m)、日影山 (897.3m)、矢大臣山 (964.7m)、万太郎山 (959.4m)、および、鬼ヶ城山 (887.3m) などの山麓の地域に発達する、崩壊性堆積物 (cl) がある。

また、図葉南東隅の差塩 (さいそ) 地域には、湿原性堆積物 (sm) の発達がみられる。

現河床および氾濫原堆積物 (sg) は、砂礫からなる堆積物で、図葉内を流れる各河川筋に発達している。図葉ほぼ中央部の、夏井地域から下流の夏井川の川筋や、図葉南部の中三坂から下三坂地域を流れる、三坂川筋に沿って、やや発達がよい。厚さは最大でも1.5m以下である。

低地堆積物 (smg) は、連続性のない泥層を挟む砂層を主とし、礫をまじえた堆積物からなるが、地域によりかなり変化がある。

図葉内の各地域に発達している、大小の谷底低地を埋めている堆積物の、おもに表層部を構成する堆積物として発達している。地域によっては、低地を埋める堆積物の大半を構成している場合もある。

厚さは、厚いところでも1.5m前後で、ふつう1m程度だが、崩積性の堆積物の発達しやすい地域では、2m前後に達する場合もある。

以上の堆積物は、いずれも完新世の時期の堆積物である。

低位段丘堆積物 (msg) には、二つのタイプがある。ひとつは、やや連続性のある泥層やシルト層を挟む砂層を主とし、場所によっては木材の破片を含む、有機質のシルト層や細粒～粗粒砂層からなるもので、本図葉内



では、図葉南東隅の差塩地域に、その代表的な発達が見られるほか、図葉北東部の神俣地域や広瀬地域の一部にも発達が見られる。

もうひとつのタイプは、不連続性の泥層を挟む粗粒砂層や、泥質砂や粗粒砂をマトリックスとする、亜角～亜円の小～中礫層からなるもので、図葉西部の蓬田岳の東山麓地域や、いわき市小白井地域、また、川前地域の夏井川の沿岸部に発達している。

差塩地域に発達している未固結堆積物msgは、明瞭な段丘地形を形成しているが、そのほかの地域では、夏井川ぞいの地域に発達するものを除くと、必ずしも段丘地形を形成してはいない。

差塩地域に発達しているmsgは、第2図にしめしたように、薄い粘土層や木材片を含んだ砂質の有機質粘土層を挟む、細礫混じりの粗～細粒砂層からなる、厚さ2 m +の堆積物で、中部に淡黄褐色のガラス質細粒火山灰層を挟んでいる。

この火山灰層はその特徴から、2.1～2.5万年前の降下堆積物とされている始良Tn火山灰に対比されるものである。

差塩地域の東作の露頭からは、火山灰層直下の有機質砂層から、寒冷気候を指示する亜高山帯性のトウヒ属の化石が産出した。

差塩地域の一部には、あとでのべるように、湿原性の堆積物が発達しているところがある。地盤調査資料柱状図⑨によると、地下約8 mほどの厚さが知られているが、その一部（おそらく下半部6 m前後）は、阿武隈高地の他の地域の例からみて、地表に見られる堆積物msgに連続するものとみられる。

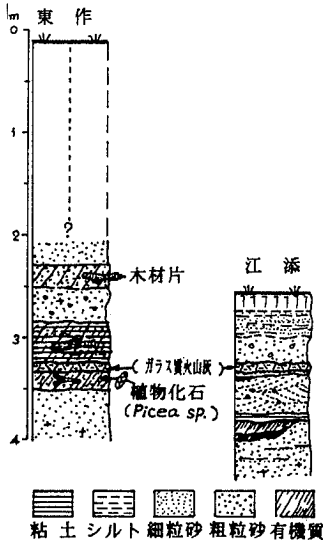
差塩地域にみられるタイプの未固結堆積物msgは、有機質の堆積物が地域により、やや厚層に発達することから、停滞水域が生じやすいような、地形的自然環境下での堆積物とみられる。

このことは差塩地域が、夏井川の支流である小玉川最上流部の、起伏の少ない高原状の、広い谷底平野に位置していることからもうなづかれる。

もうひとつのタイプの未固結堆積物msgは、さきに述べたような堆積物

の層相の特徴と、その発達地域が山麓の末端部に位置することから、崩壊性の堆積物の異相とみられる。厚さは最大でも2 m未満である。

第2図



未固結堆積物 (smgp) は、砂、泥、礫を主とする堆積物で、地域により、泥炭質の地層を挟むことがある。本図葉内では、小野町飯豊地区の川向地域、滝根町広瀬地区の赤沼や町地域、いわき市小白井地区の将監小屋地域の、ごく限られた地域にのみ発達している。

滝根町の町地域の堆積物を除き、砂、礫を主とする。町地域では砂、泥を主とし、発達の悪い泥炭質の薄層を挟むことがある。

厚さは地域によりさまざまで、1～3 m前後と変化が大きい。

堆積物smgp中に含まれている礫は、程度に違いはあるが風化が進んでいる。また、堆積物は、軽石層を挟む火山灰層に覆われていることがある。

以上の未固結堆積物msg、および、未固結堆積物smgpは、いずれも更新世の時期の堆積物である。

未固結堆積物 (cl) は、連続しない泥、砂を混じえた角～亜角礫からな

る堆積物で、その発達地域からみて、山体斜面の崩壊により生じた堆積物とみられる。本図葉内では、北半部の地域内に残丘状にそびえる各山体の、山麓地域の各所にみられる。

図葉北東縁部の大滝根山（1,192.5m）の南山麓をはじめとして、万太郎山（959.4m）、羽山（970.3m）、鬼ヶ城山（887.3m）、矢大臣山（964.7m）の山麓部の各所に、緩斜面地形を形成して発達しているほか、図葉北西部では、一盃山（855.8m）、日影山（879.3m）、蓬田岳（952.2m）の山麓の地域に、緩斜面地形をつくってよく発達している。

以上の地域のほか、いわき市下桶売地区の棚木地域や、平田村永田地区の切山地域に、ごく小規模な発達がみられる。急斜面の崩壊により生じたものとみられる。

未固結堆積物clの一部は、現在の谷部を埋めた状態で発達している、完新世の堆積物である。緩斜面地形を形成して発達するものの多くは、軽石層を挟む火山灰層で覆われており、更新世の時期の堆積物とみられる。

未固結堆積物（ms）は、粘土、シルト、砂を主とし、多量の腐食物を含む沼湿地性の堆積物で、いわき市差塩地区の堀添地域の一部に発達している。地盤調査のボーリング資料⑧、および、⑨によると、5～8m前後の厚さを示しているが、さきへのべたように、下半部の大部分は、未固結堆積物msgに連続する堆積物と見られることから、厚さは1.5m前後未満と推定される。

堆積物msは、周辺の地域に、堆積物msgからなる段丘の発達があることから、堆積物msgに不整合に重なるものとみられる。

未固結堆積物msの大部分は、完新世の時期の堆積物と推定される。

## (2) 固 結 堆 積 物

本図葉内に発達する固結堆積物には、滝根層群として一括されている堆積物で、図葉北東縁の地域のごく限られた範囲に、わずかに発達しているにすぎない。

A層（石灰岩=Ls）、B層（頁岩、頁岩・チャート薄互層=Sc）、および、

C層（頁岩、チャート、緑色岩類=Scg）の三層に区分される。

A層の石灰岩は、あとでのべる花崗岩類の貫入をうけ、結晶質石灰岩（糖状石灰岩）となっている。図葉北東部の万太郎山北北西2.5kmにある、961.2mの三角点の東側の小範囲に、小岩体として発達している。一部北側の「常葉」図葉の範囲にはいるが、岩体の水平的な広がり、東西×南北がおよそ0.3×0.6kmである。

B層、および、C層は、頁岩、頁岩・チャート薄互層、および、頁岩、チャート、緑色岩類からなる。

B層およびC層の頁岩は、花崗岩類の貫入の影響をうけ、ホルンフェルス化している。

C層の緑色岩類は、塩基性の凝灰岩や火山岩などの源岩が、花崗岩類の貫入による接触変成作用をうけたとみられる角閃岩や、蛇紋岩化した橄欖岩・輝岩などからなる。緑色岩類とホルンフェルスとは、数m～数十mの単位で繰り返す。

B層およびC層は、図葉北東縁部滝根町神俣地区の北東部の地域に、北側の「常葉」図葉からの延長として、ごく小範囲に発達するのみである。

B層とC層は整合に重なりとされている。位置的に隔離されて発達するA層との関係については、不明である。

滝根層群の地質時代については、化石の産出が知られていないこと、層相が特異なため、隣接地域の相当層との対比がむずかしいことなどから、特定されておらず、花崗岩類との関係から、先白亜紀とされている。

### (3) 深 成 岩

本図葉内に発達している深成岩類には、花崗岩質岩石と斑糲岩質岩石とがある。花崗岩質岩石は本図葉の大半の地域を占めて発達している。斑糲岩質岩石は、一盃山、十石山、矢大臣山などの地域に発達している。

#### ① 花崗岩質岩石

本図葉の大半の地域を占めて発達する花崗岩質岩石は、その岩相上の特徴から、花崗岩質岩石（Ⅰ）、花崗岩質岩石（Ⅱ）、および、花崗岩質

岩石（Ⅲ）に区別される。

花崗岩質岩石（Ⅰ）＝Gr（Ⅰ）は、優白色細粒の黒雲母花崗岩を主とする。一部に複雲母花崗岩（白雲母黒雲母花崗岩）がみとめられる。

図葉北部の小野町吉野辺地区の田尻から早渡地域にかけて、北西～南東方向に長軸をもつ貫入形態をとり発達している。このほかの地域には分布していない。

花崗岩質岩石（Ⅱ）＝Gr（Ⅱ）は、灰色黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、および、黒雲母花崗閃緑岩などからなる。

図葉西西部の地域では、北側から、一盃山（855.6m）から日影山（879.3m）の地域にかけて、さらにその南側の郡山市田母神地区から蓬田岳（952.2m）をへて、その南方の平田村下蓬田地区から玉川村南須釜地区にかけてと、その東方の、平田村永田から駒形地区にかけて発達している。

西側の地域ほどより優白色の灰色黒雲母花崗岩が主体となる。蓬田岳北側と西側の一部には、斑状黒雲母花崗岩体の発達もみられる。

図葉東西部の地域では、図葉北東隅の川内村万太郎山（959.4m）周辺一帯から、南方のいわき市川前地区にかけて、黒雲母花崗岩を主体とする岩体が発達している。この岩体の東側の一部には、淡紅色黒雲母花崗岩が伴なわれている。

さらにその南方の、一本山毛櫟（667.6m）の山体を中心として発達している岩体は、黒雲母花崗閃緑岩を主体とする。

花崗岩質岩石（Ⅲ）＝Gr（Ⅲ）は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる。さきにもべた花崗岩質岩石（Ⅰ）および、花崗岩質岩石（Ⅱ）の発達する地域を除く、本図葉の各地域にわたってひろく発達している。捕獲岩を多く含む。

花崗岩質岩石（Ⅰ）、花崗岩質岩石（Ⅱ）、および、花崗岩質岩石（Ⅲ）は、いずれも風化がいちじるしく進んでおり、いわゆる「マサ」化している。その深度は、深井戸ボーリングの柱状図資料によると、30m以上

に達しているところも知られている。

② 斑糲岩質岩石

斑糲岩質岩石 (Gb) は、閃緑岩、および、斑糲岩からなる。図葉北東部に位置する矢大臣山 (964.7m)、図葉中央やや西側に位置する十石山 (718.1m)、図葉北西部に位置する一盃山 (855.8m) の、いずれも山頂部を中心とする小範囲に、発達している。

斑糲岩質岩石の風化の程度は、花崗岩質岩石にくらべると、非常に低い。

以上の深成岩類については、放射性元素を利用した年代測定が行なわれており、いずれも白亜紀の時期の貫入岩体とされている。

(4) 変成岩

本図葉南部のほぼ中央の地域と、図葉南西隅の地域に、変成岩類が発達している。いわゆる御在所・竹貫 (たかぬき) の変成岩類である。

① 御在所変成岩類 (Gsch)

変成岩類Gschは、塩基性岩源片岩 (bs)、珪質・砂質・泥質岩源片岩 (ms) からなる。図葉南縁部の地域の、いわき市上三坂地区の一部と、図葉南西隅の、石川町の地域に発達している。

各地域とも、変成岩類の片理の走向は、地域により部分的に多少の変化はあるが、図葉域内では、北北西～南南東方向、または、北西～南東方向をとるのが大半である。

② 竹貫変成岩類 (Bsch)

変成岩類Bschは、泥質岩源片麻岩 (pg) からなる。図葉南西隅の、ごく小範囲に発達しているにすぎない。片理の走向の方向は、変成岩Gschとほぼ平行している。

以上の変成岩類も、谷部に露出する露頭部のものを除くと、地域により程度には差があるが、風化が進んでいることがおおい。

御在所変成岩類の発達する地域の一部 (いわき市遠野町) からは、中生代のジュラ紀の放散虫の化石が発見されている。このことから、御在

所変成岩類の源岩の一部は、中生代の堆積岩類等とみられている。

竹貫変成岩類の源岩の地質時代については、花崗岩類との関係から、先白亜紀ということしかわかっていない。

#### (5) 地 質 構 造

本図葉南部のほぼ中央には、北北西～南南東方向に長軸をもつ形態をとって、御在所変成岩類が分布している。その内部には、面構造が発達しており、片理として観察される。その走行は、北北西～南南東方向、または、北西～南東方向をとる。また、同岩体中には、北北西～南南東の走向をとってはしる、縦走断層の馬場平断層がある。

図葉南西隅に分布している御在所変成岩類、および、竹貫変成岩類の面構造の走向は、北西～南東方向をしめしている。

図葉の北東隅に、わずかに発達している滝根層群は、北側の「常葉」図葉内に分布している同層群の延長にあたることから、B層、および、C層については、その走向はほぼ南北方向をとるものとみられる。A層については、層位的な位置関係が「常葉」図葉とは異なるため、不明である。

一方、図葉内に発達している未固結堆積物は、崩壊性堆積物を除き、ほぼ水平の状態に堆積している。残丘状にそびえる山体の山麓部に発達している崩壊性堆積物は、低地側に緩く傾きながら、緩斜面地形を形成して発達する。

## 2. 応 用 地 質

本図葉の地域内には、鉄を主とする金属資源のほか、非金属資源として石灰岩が発達している。また、花崗岩の未風化の部分が、石材として採掘されている。

図葉内のいくつかの地域では、湧出する鉱泉や温泉を加熱利用している。また、図葉の地域内の谷底を埋めて発達している、未固結堆積物smg中には、マサ化した花崗岩質岩石の風化帯とともに、自由地下水が賦存している。

#### (1) 地 下 資 源

### ① 金属資源

図葉南側のほぼ中央部にあたる、平田村南東部の地域と、いわき市上三坂地域にかけては、御在所変成岩（Gsch）にともなわれる変成鉍床として、鉄鉍層などの発達知られている。平田村地域の鉍層は、含マンガン鉄鉍層で、小平鉍山として稼行された経緯がある。

上三坂地域の鉍床は、縞状鉄鉍鉍床で、上三坂鉍山と称された。

### ② 非金属資源

図葉北東隅の、961.2mの三角点東側には、結晶質石灰岩の小岩体がある。採掘の対象とされている。

また、図葉内の各地域には、花崗岩質岩石の未風化の部分の採掘する、石切り場が、各所に点在する。その大半は、花崗岩質岩石（Ⅱ）の、発達地域にあっている。

### (2) 鉍泉、および、温泉

本図葉の地域内には、古くから知られている、針湯、日影の湯、湯沢の湯、小町温泉など、いくつかの鉍・温泉がある。源泉の温度は14～28℃で、いずれも加熱利用している。泉質は、単純、単純炭酸鉄泉が多い。

### (3) 水質源

本図葉の地域内に発達している花崗岩質岩石は、いずれも各地域で風化が進んでおり、地下水の賦存体としての、条件を備えている。また、図葉の各地域に分布して谷底低地を埋めている、未固結堆積物msgも、同条件を備えている。これらの堆積物等の間隙には、自由地下水が水資源として、自然流動の状態、貯留されていると見られる。

水系の発達状態や地形的条件によっては、相当量の地下水量を望むこともできるが、詳細については、あらためて調査を要する。

### (4) 災害地質

本図葉の地域内で、表層地質の調査結果から、予測される災害についてのべると、つぎのようなことがらが指摘できる。

#### ① 図葉内に発達する谷底低地には、地域により、意外なほど軟弱な地盤



が、各地域にみられる。柱状図資料の、②、③、⑤、⑥、⑦、⑧、等々そのN値から判断して、構造物等の種類によっては、支持基盤として注意を要する。

② 残丘状にそびえる山体斜面には、ほとんど例外なく、山体斜面の崩壊によるとみられる、崩壊性堆積物が、山麓部にみとめられる。このことは、過去において、山体斜面の崩壊があったことを意味しており、また、現時点でも、山体中腹の谷部に残存している堆積岩塊は、降水量等の条件によっては、土石流等の災害の発生に、結びつく危険の可能性を含んでいる。

③ 図葉の大半の地域を占めて発達している花崗岩質岩石は、風化がいちじるしく進行して、いわゆる「マサ」化がすすんでいる。

花崗岩質岩石からなる丘陵地や山地の、現状を改変しての土地利用等については、浸食による土砂の流出、潜在する節理面等が切り面となる崩落や滑落など、その規模は大きくないとみられるが、土砂災害などの発生を伴う危険性がある。

## 参考文献

- 福島県企画開発部（1964）：福島県鉱産誌、福島県、296p.
- 経済企画庁総合開発局（1972）：20万分の1表層地質図「福島県」、土地分類図「福島県」、経済企画庁総合開発局、4-9.
- 日本の地質（東北地方）編集委員会（1989）：東北地方（日本の地質2）、共立出版、338p.
- 永広昌之・蟹沢聰史・竹谷陽二郎（1989）：阿武隈山地中央部大滝根山西方に分布する先第三系滝根層群、福島県立博物館紀要 No. 3、21-37.
- Hiroi, Y. Yokose, M. Oda, T. Nohara, T. Yao, A. (1987) : Discovery Jurassic radiolaria from acmite-bearing metachert of the Gosaisyo metamorphic rocks in the Abukuma terrane, northeastern Japan. J. Geol. Soc. Japan, **93**, 445-448.
- 加納博・黒田吉益・宇留野勝敏・濡木輝一・蟹沢聰史・丸山孝彦・梅村隼夫・光川寛・瀬戸延男・大平芳久・佐藤茂・一色直記（1973）：竹貫地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、109p.
- 鈴木敬治・吉田義・芳賀喜代次・斑目芳光（1984）：5万分の1表層地質図「須賀川」、土地分類基本調査「須賀川」、福島県、22-31.
- 鈴木敬治・吉田義・白瀬美智男（1993）：5万分の1表層地質図「川前・井出」、土地分類基本調査「川前・井出」、福島県、26-44.
- 吉田義・真鍋健一（1996）：5万分の1表層地質図「常葉」、土地分類基本調査「常葉」、福島県、32-43.
- 渡辺万次郎・三本杉巳代治・鈴木敬治・水戸研一（1995）：20万分の1福島県地質図・同説明書、福島県、34p.

### Ⅲ 土 壤 調 査

#### 1. 農 地 土 壤

##### 台地および低地の土壌

小野新町図葉の農耕地は、阿武隈山系の山地・丘陵地地域にあり、夏井川、平田川、谷田川を代表として中小多くの川が存在し、その流域には樹枝状に細かにはりめぐらされた谷底平野が無数に形成されている。広い谷底平野には灰色低地土壌がみられるが、ほとんどはグライ土壌が存在している。これらの土壌に隣接し褐色森林土壌が分布し、山麓緩斜面には黒ボク土壌が点在していることが多い。この図葉内の土壌の母材は花崗岩類が主体であり、一部に火山灰や変成岩、石灰岩等がみられる。

黒ボク土壌 2、褐色森林土壌 4、褐色低地土壌 1、灰色低地土壌 3、細粒グライ土壌 3、泥炭土壌 1 の合計 14 土壌統群に区分した。

##### (1) 黒ボク土壌

###### ① 飯館統（表層腐植質黒ボク土）

表層の腐植含量は 5～10% 程度で、腐植層の厚さが 40cm 程度である。土性は壤質～粘質土であるが、下層は黄褐色の粘質～強粘質の土壌である。土地利用は畑であり、広く分布している。リン酸吸収係数が高いので、リン酸質資材の施用が必要である。生産力はやや低い。

###### ② 沢尻統（淡色黒ボク土）

火山質土であり、表層の腐植含量は 5% 以下である。表層の土性は壤質または粘質土であり、下層は黄褐色の粘質または強粘質土である。土地利用は畑であり、平田村中部に分布する。生産力はやや低い。

##### (2) 褐色森林土壌

山腹や山麓緩傾斜地に分布し、表層は褐色～暗褐色で、次層は主に黄褐色を呈する。

###### ① 上川崎統（細粒褐色森林土）

花崗岩を母材とした残積土である。土性は主に粘質であるが、一部強粘質もある。表層は暗褐～褐色であり、下層は腐植をほとんど含まない黄褐の土壤である。土地利用は畑であり、須賀川市東部の阿武隈山系地域などに分布する。酸性矯正をする必要があり、生産力は中程度である。

② 下川崎統（中粗粒褐色森林土）

花崗岩を母材とした残積土である。表層の土色は主に暗褐色で、下層は黄褐色が主体である。土性は壤質～砂質である。土地利用は畑で、本図葉内に広く分布する。酸性矯正をする必要があり、生産力は中程度である。

③ 笹目田統（礫質褐色森林土）

変成岩や一部花崗岩を母材とした残積または崩積土である。土色は黒褐～黄褐で土性は壤質～粘質である。深さ40cm内外から礫層が出現する。いわき市中三坂、上三坂などに分布する。土地利用は畑であり、生産力はやや低い。

④ 南戸沢統（礫質褐色森林土）

表層は黒褐～灰褐色で、やや腐植を含む粘質土である。次層は腐植は少なく黒褐～黄褐色の粘質土である。深さ20cmから礫層が出現することが多い。土地利用は畑で、生産力はやや低い。

(3) 褐色低地土壤

河川流域に分布する沖積土壤である。ほぼ全層が褐色系の土壤であり、土性は砂質～粘質である。

① 石畑統（中粗粒褐色低地土）

表層、下層とも腐植含量の少ない黄褐～暗褐色の土壤である。土性は壤質～砂質である。土地利用は畑で、河川沿の後背地などに分布し、生産力の中である。

(4) 灰色低地土壤

土色が灰色～灰褐色を呈する土壤であり、土性は壤質から強粘質である。河川流域の平野や下位段丘などに分布し、下層に礫層や砂礫層のみられる

ところがある。

① 赤羽統（細粒灰色低地土）

表層、下層ともに主に灰色または灰褐色の粘質～強粘質土である。全層に膜状、管状の斑紋がある。土地利用は水田である。生産力は中程度である。

② 遠下統（中粗粒灰色低地土）

表層は壤質～粘質、次層は砂質の土壤で、深さ40cmから砂層が出現する。土地利用は水田で、生産力は中程度である。

③ 南移統（礫質灰色低地土）

表層、次層は壤質～粘質であるが、深さ30cmあたりから礫層あるいは砂礫層が出現する。土地利用は水田であり、生産力はやや低い。

(5) 細粒グライ土壤

全層もしくは作土下層に青灰～青色を呈するグライ層が認められる土壤である。阿武隈山地の樹枝状低地などに分布する。グライ層の出現位置や母材により3土壤統に区分した。

① 芦沢統（細粒強グライ土）

花崗岩を母材とした崩積土で、全層または作土直下からグライ層となる。表層、次層とも土性は強粘質である。土地利用は水田であり、生産力は低い。

② 上太田統（細粒強グライ土）

花崗岩を母材とした崩積土で、全層または作土直下からグライ層となる。表層の土性は粘質で、次層は壤質～粘質である。土地利用は水田であり、生産力は低い。

③ 牧野統（細粒グライ土）

花崗岩を母材とした崩積土で、グライ層は深さ50cm前後からみられる。表層は腐植を含み、土性は粘質～強粘質で、次層も粘質～強粘質である。土地利用は水田で、生産力は低い。

(6) 泥炭土壤

沼沢地に繁茂したヨシやハンノキなどの植物遺体が未分解のまま堆積している低地の泥炭土壌である。

① 岩 沼 統

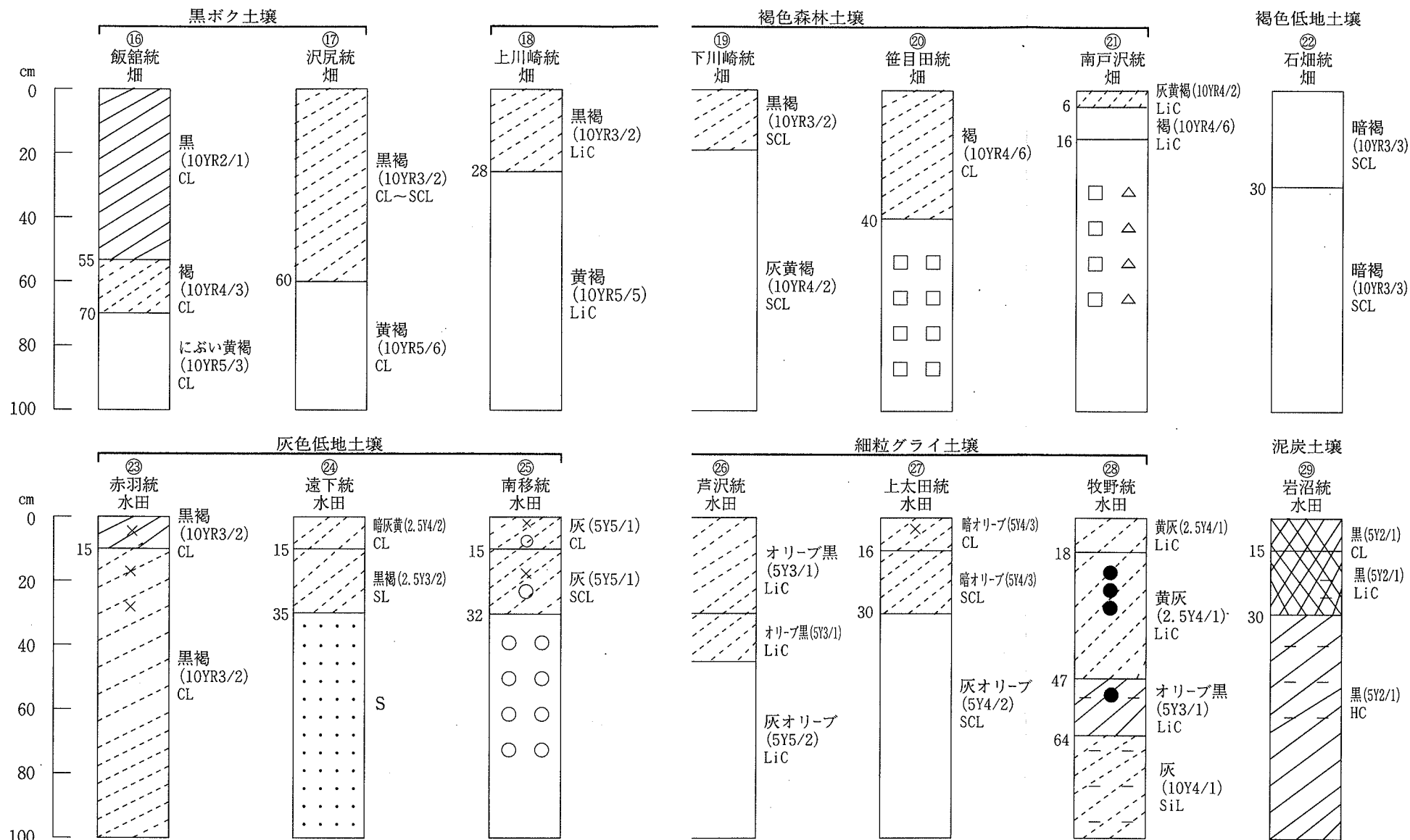
表層および次層は、灰～黒褐色の粘質～強粘質土で、深さ50cm以内より泥炭層が出現する。土地利用は水田で、いわき市の差塩など谷底平野や下位段丘に分布する。生産力は低い。

(福島県農業試験場 副主任研究員 三 浦 吉 則)

## 参 考 文 献

- 福島県農業試験場（1968）：水田及び畑地土壌生産分級図、福島県中通り中部地域－1（郡山市－1）
- 福島県農業試験場（1970）：水田及び畑地土壌生産分級図、福島県阿武隈山系中部地域（須賀川市、平田村、玉川村、石川町、浅川町、古殿町）
- 福島県農業試験場（1971）：水田及び畑地土壌生産分級図、福島県阿武隈山系中部地域（田村郡三春町、船引町、常葉町、大越町、滝根町、小野町）
- 福島県農業試験場（1973）：水田及び畑地土壌生産分級図、福島県阿武隈山系南部地域（いわき市）
- 福島県農業試験場（1978）：地力保全基本調査総合成績書
- 福島県農業試験場（1991）：農芸化学部試験成績書

# 柱状断 図(農地土壤)





## 2. 林 地 土 壤

### 山地および丘陵地の土壌

「小野新町」図葉内の土壌の特徴は、滝根町和貢付近に局所的に出現している弱暗赤色化傾向の褐色森林土壌、図葉内に広く安定的に見られる褐色森林土壌、さらに山麓地の凹地の所々に認められる黒色土壌と、緩斜な尾根に出現する淡黒色土壌に大別される。

出現している土壌統は黒ボク土壌2、淡色黒ボク土壌1、乾性褐色森林土壌5、敵潤性褐色森林土壌5、湿性褐色森林土壌2の合計15統である。これらの土壌は、地形、地質の影響を受け、また、過去の人為的土地利用のあり方や植生の遷移により現在見られる土壌形態を示すことは勿論であるが、本図葉は特に緑色片岩、頁岩、斑れい岩が局部に見られ、これに花崗岩類が広い範囲に分布している。

土壌統は特に地質を反映させたが、成熟した土壌以外に、未熟なものも含まれている。

このため、これらは近似値の統へ挿入したことを付記しておく。以下、図葉内に出現している土壌は次のとおりである。

#### (1) 黒ボク土壌

山地内の凹地・山麓平坦部に局所的に分布する火山灰質の堆積物を母材とする土壌である。1970・1974・1975年時の適地適木調査報告書によれば、阿武隈高地の黒ボク土壌は現在よりやや広範囲に出現していたが、その後のスギ・アカマツ等の拡大造林により、また、広葉樹林の伐採や下層植生の遷移等により、黒色から淡黒色へと退色または褐色森林土壌化へと移行したものと思われる。典型的な層厚の黒色土壌は一部の凹地を除き少ない。

##### ① 小白井統 (Ojiroi)

一盃山 (856m)、日影山 (879m)、蓬田岳 (952m)、いわき市川前などの主として耕作地周辺の平坦地や凹地、山脚部に局所的に見られる黒ボク土壌で、一部に埋没土も認められる。地質的には灰色黒雲母・黒雲

母花崗岩及び黒雲母花崗閃緑岩等を範囲とする。

A層は100cm以上の厚さがありA<sub>1</sub>~A<sub>4</sub>に分かれ、かなり深い。土色は黒色で腐植に富み、土性は壤土、下層に従って埴壤土となる。硬度は軟~やや堅、構造は地表部に団粒状及び粒状が認められるが、A<sub>2</sub>層以下では粒状及び塊状がみられる。石礫は特にない。

水分状態は潤~やや湿である。林地の生産力は中庸。黒色土壌B<sub>l</sub>D<sub>-E</sub>型に相当する。

② 矢大臣統 (Yadaijin)

矢大臣山(965m)上部とその山麓地、羽山(970m)及び万太郎山(959m)との境界山麓地、いわき市三和下三坂等の主として平坦地や凹地に局所的に見られる黒ボク土壌である。

地質的には角閃石黒雲母花崗閃緑岩を範囲とする。

A層は40cmの厚さがありA<sub>1</sub>~A<sub>2</sub>に分かれる。土色は黒色で腐植に富み、土性は埴壤土で粘土質が強い。硬度は軟~やや堅、構造はA層に団粒状が認められ、A<sub>2</sub>層以下では粒状及び塊状がみられ、やや締まりぎみである。石礫はB-C層に半角礫がある。

水分状態は潤である。林地の生産力は中庸。黒色土壌のB<sub>l</sub>D<sub>-E</sub>型に相当する。

(2) 淡色黒ボク土壌

日影山や万太郎山、一本山<sup>か</sup>毛<sup>な</sup>櫛(668m)の山頂平坦部に僅かに出現する土壌で、黒ボク土壌より淡色なA層を持ち、土層も浅い。

① 川前統 (Kawamae)

基岩は花崗岩類を主とするが、母材にはこれらの風化物と火山灰が混入する。A層は15cmと浅く、A<sub>1</sub>~A<sub>2</sub>に分かれる。土色は淡い黒褐~暗褐で腐植にやや富む。土性は壤土、硬度はやや堅、構造には粒状がみられる。B層は割合深く土色は褐~にぶい黄褐、腐植は乏しい。土性は埴壤土で構造は弱いカベ状を呈し、半角礫を僅かに含む。水分は地表部で半乾燥し、下層部でやや潤である。林地の生産力は中~下。

淡黒色土の $lB\ell_C \sim lB\ell_D(d)$ 、黒色土の $B\ell_C \sim B\ell_D(d)$ 型に相当する。

(3) 乾性褐色森林土壌

山地の尾根や山腹凸部、風衝地に広く分布し、花崗岩類・変成岩類・未固結堆積物(角礫等)の風化物を母材とする土壌である。一般に土壌は浅く、特にA層は10cm程度の発達のものが多い。

① 平田I統 (Hirata-I)

小野新町の日影山・一盃山、平田村の蓬田岳周辺及び東山までの地域、川内村の万太郎山からいわき市川前～三和に至る阿武隈高地の山腹上部や凸部、さらに阿武隈丘陵地に分布し、中生代の灰色黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・黒雲母花崗閃緑岩および細粒黒雲母花崗岩等を母材とする土壌である。A-B層は5cm程度と浅く、土色は暗褐で腐植を含む。土性は壤土で硬度は軟、構造は粒状及び一部に細粒状が認められる。B層は割合深く $B_1 \cdot B_2 - C$ に分かれ、土色は褐～にぶい黄褐、腐植に乏しい。土性は壤土～砂質壤土、硬度はやや堅～堅、構造は特に発達していなく、水分はやや乾～やや潤と乾燥傾向にある。

林地の生産力は低い。土壌は褐色森林土壌の $B_A \cdot B_B \cdot B_C$ 型を主体とする。

② 小野I統 (Ono-I)

小野新町の殆どと、いわき市三和(中三坂及び差塩)、平田村西山地域等阿武隈高地の山腹上部や凸部に分布し、主に中生代の角閃石黒雲母花崗閃緑岩を母材とする土壌である。A層は4cmと浅く、土色は黒褐色で腐植を含む。土性は壤土で硬度は軟、構造は細粒状が認められ、極めて乾燥傾向にある。B層は30cm前後で、 $B_1 \cdot B_2$ に分かれ、土色は暗褐から褐、腐植をやや含む。土性は壤土、硬度はやや堅、構造は $B_1$ 層に粒状及び一部に細粒状が認められる。水分は乾～やや乾である。林地の生産力は低い。土壌は褐色森林土壌の $B_A \cdot B_B \cdot B_C$ 型を主体とする。

③ 三和I統 (Miwa-I)

いわき市三和(上三坂)の一部と石川町北山の一部地域の山腹上部に

分布し、先白亜紀の緑色片岩・黒色片岩を母材とする土壤である。A—B層は10cmとやや深く土色は暗褐で腐植に富む。土性は壤土～埴壤土で硬度は軟、構造は粒状が認められる。B層は深くB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>—Cに分かれる。土色は褐～にぶい黄褐で、腐植はB<sub>1</sub>でやや含む。土性は壤土～埴壤土、硬度はやや堅く、構造はB<sub>1</sub>層に塊状が認められ、水分は潤である。林地の生産力は平田I・小野Iよりは高い。褐色森林土壤のB<sub>B</sub>・B<sub>C</sub>型を主体としている。

④ 滝根I統 (Takine—I)

滝根町和貢地域に部分的に出現する土壤で、先白亜紀の頁岩・チャート・緑色岩類と完新世～更新世の角礫等を母材とする土壤である。A層は8cmと浅く、土色は極暗褐で腐植に富む。土性は埴壤土で硬度は軟、乾燥しており粒状構造が認められる。B層は80cm前後と深くB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>に分かれる。土色は褐で腐植に乏しいもののカルシウム含量は高い。土性は埴壤土～埴土、硬度はやや堅く、構造はB<sub>2</sub>層に弱いカベ状が認められ、水分はやや乾～やや潤である。林地の生産力は平田I・小野Iよりはやや高い。土壤は褐色森林土壤のB<sub>B</sub>・B<sub>C</sub>型と非塩基系暗赤色土のdDR<sub>B</sub>・dDR<sub>C</sub>型の中間的性質を有している。

⑤ 十石山I統 (Jukokuyama—I)

一盃山・矢大臣山・十石山の高地と山腹上部に分布し、中生代の斑れい岩・閃縁岩を母材とする土壤である。A層は5cmと浅く、土色は暗褐で腐植にやや富む。土性は埴壤土で硬度は軟、やや乾燥しており粒状構造が認められる。B層は深くB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>に分かれる。土色は褐～にぶい黄褐で腐植に乏しい。土性は埴壤土で粘質が強い。硬度はやや堅く、構造はB<sub>2</sub>層に弱いカベ状が認められ水分はやや潤である。林地の生産力は滝根I統よりやや低い。土壤は褐色森林土壤のB<sub>B</sub>・B<sub>C</sub>型を主体としている。

(4) 適潤性褐色森林土壤

山地や丘陵地の斜面中部から山腹下部にかけて広く分布し、各種岩石の風化堆積物やその供給物を母材とする土壤である。この土壤は乾性と湿性

の中間に属するが、適潤性土壌 ( $B_b$ 型) よりも、やや乾性の偏乾亜型 ( $B_{b(d)}$ ) が主流であり、その出現範囲は広い。

① 平田Ⅱ統 (Hirata—Ⅱ)

平田Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に広く分布する。A層は20cmとやや浅く2層に分かれる。土色は黒褐～極暗褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、構造は $A_1$ に団粒状及び粒状が認められる。B層は深く、 $B_1 \cdot B_2$ に分かれる。B層の土色はにぶい黄褐で腐植に乏しい。土性は壤土から砂質壤土で、硬度はやや堅、構造は特にない。土壤水分は潤である。林地の生産力は中庸である。褐色森林土壌の $B_{b(d)}$ を主体として、一部 $B_b$ 型に相当する。

② 小野Ⅱ統 (Ono—Ⅱ)

小野Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に広く分布する。A層は20cm、A—B層は40cmと深く、土色は黒褐～暗褐で腐植に富む。土性は壤土で下層に従ってやや粘土質が強くなる。硬度は軟～やや堅、構造は粒状が認められる。土壤水分はやや潤である。B層は40cm以上で、土色は褐、腐植に乏しい。土性は埴壤土で、硬度はやや堅、構造は特にない。水分は潤である。林地の生産力は阿武隈山系において中庸である。褐色森林土壌の $B_{b(d)} \cdot B_b$ 型を主体としている。

③ 三和Ⅱ統 (Miwa—Ⅱ)

三和Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に分布する。A層は30cm程度と深く2層に分かれる。土色は黒褐～極暗褐で腐植に富む。土性は埴壤土で硬度は軟、構造は団粒状～粒状が認められる。B層は70cm前後で土色は褐～にぶい褐、 $B_1$ で腐植を含む。土性は埴壤土～埴土で硬度はやや堅、構造は $B_1$ に塊状がある。土壤水分は潤であり、半角礫を含む。

林地の生産力は中庸である。褐色森林土壌の $B_b$ を主体に $B_{b(d)}$ を包括する。

④ 滝根Ⅱ統 (Takine—Ⅱ)

滝根Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に小分布する。A層は40cmと深

く、 $A_1 \cdot A_2$ に分かれる。土色は暗赤色化の黒～黒褐で腐植に富む。土性は埴壤土で硬度はやや堅、構造は $A_1$ に団粒状が、 $A_2$ に塊状が認められる。石礫は多少の小角礫がある。B層は60cm前後に達し、土色は褐で腐植に乏しい。土性は埴土で、硬度はやや堅、構造は弱い塊状が認められる。土壤水分は潤である。林地の生産力は中庸よりやや良好である。褐色森林土壌の $B_D$ を主体に $B_{D(d)}$ 型が含まれる。

⑤ 十石山Ⅱ統 (Jukokuyama—Ⅱ)

十石山Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に小分布する。A層は20cm程度とやや浅く、土色は黒褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、構造は団粒状～粒状が認められる。B層は80cm前後で土色は暗褐～褐で $B_1$ では腐植を多少含む。土性は壤土～埴壤土で硬度はやや堅、構造は $B_1$ に塊状がある。土壤水分は潤であり半角礫を含む。

林地の生産力は中庸である。褐色森林土壌の $B_{D(d)} \cdot B_D$ 型に相当する。

(5) 湿性褐色森林土壌

山地の斜面下部から沢沿いにかけて小規模に分布し、各種岩石の供給物を母材とした土壌である。水分の供給が豊富で、しかも水の停滞がなく土壌養分も極めて多い。

この土壌は $B_E$ 型を主体に、一部 $B_{D(w)}$ 型が含まれ、スギを主体に生長が旺盛である。

① 平田Ⅲ統 (Hirata—Ⅲ)

平田Ⅰ統・平田Ⅱ統と同じ母材よりなり、同地区の山腹斜面の長い谷筋の崩積地に分布する。A層は40cmあり2層に分かれる。土色は黒褐～暗褐で $A_1$ はすこぶる腐植に富む。土性は壤土～埴壤土で、硬度は軟～やや堅、構造は地表部に団粒状が、 $A_2$ に塊状が認められる。B層は60cm以上あり、土色は褐で腐植をやや含む。土性は埴壤土で、硬度はやや堅、構造は特にみられない。土壤水分は潤である。角礫・半角礫を含む。

林地の生産力は高い。褐色森林土壌の $B_E$ を主体に一部 $B_{D(w)}$ が混在する。

② 小野Ⅲ統 (Ono—Ⅲ)

小野Ⅰ統・小野Ⅱ統と同じ母材よりなり、同地区の山腹斜面の長い谷筋の崩積地に僅かに分布する。A層は3層に分かれ腐植に富む。土性は埴土～微砂質埴土で硬度はA<sub>1</sub>で軟、A<sub>3</sub>で堅となっている。構造は地表部に団粒状が、A<sub>2</sub>に粒状～塊状がみられる。土壤水分は地表部で潤、下層部でやや湿である。林地の生産力は高い。褐色森林土壤のB<sub>D(w)</sub>を主体に一部B<sub>E</sub>が混在する。

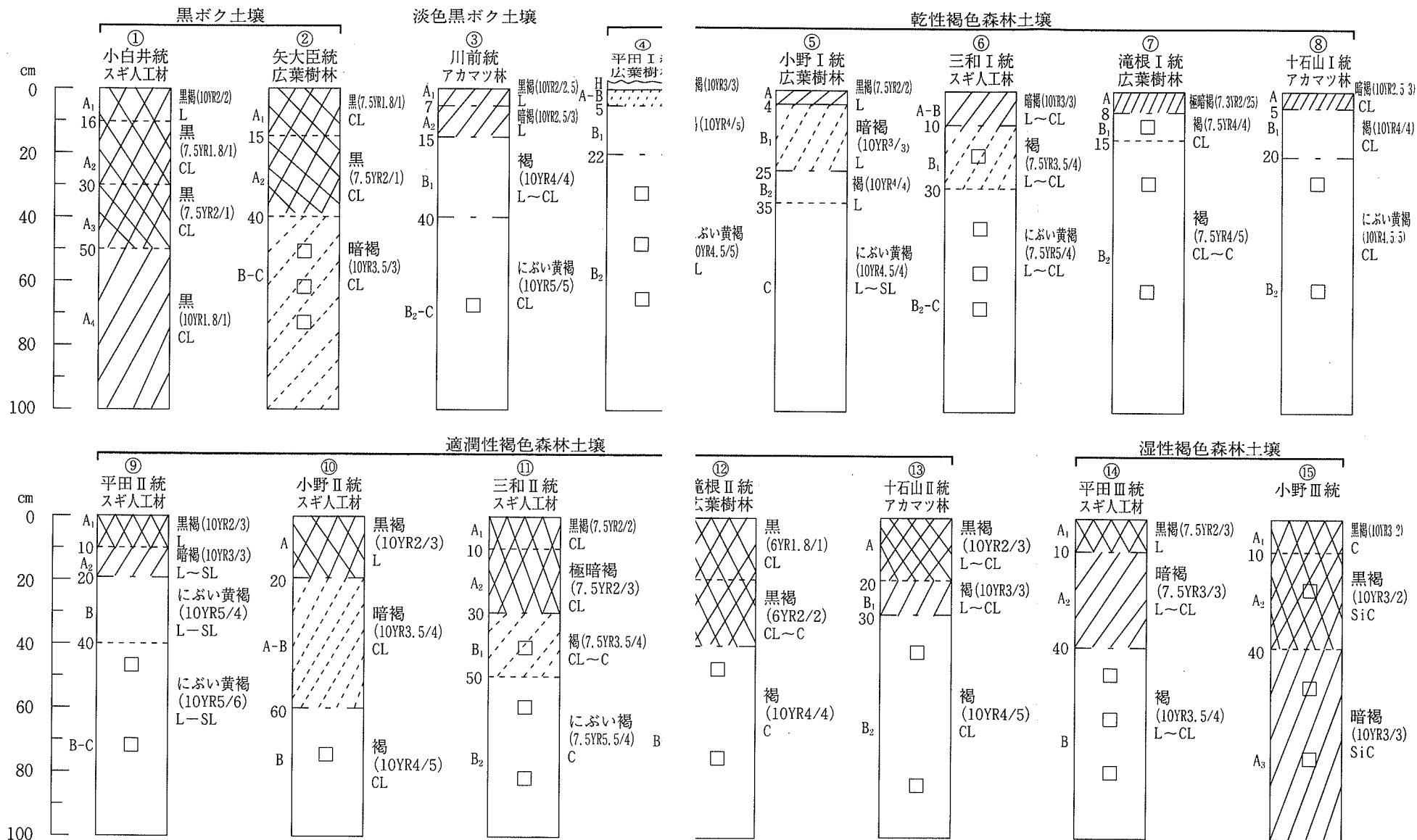
(福島県林業試験場 主任研究員 今井辰雄)

## 参 考 文 献

- 1). 添田幹男・大平直水・平川昇：適地適木調査報告（磐城森林計画区）、福島県農地林務部、33p、1970
- 2). 添田幹男・今井辰雄：適地適木調査報告（郡山森林計画区、田村・石川・東白川）、福島県農地林務部、44p、1974
- 3). 今井辰雄・荒井賛：福島県中・浜通り地方におけるスギ林地生産力調査結果から、日本林学会東北支部会誌No.32、164—166p、1980
- 4). 添田幹男・今井辰雄：適地適木調査報告（郡山森林計画区、福島森林計画区）、福島県農地林務部、49p、1975
- 5). 今井辰雄ほか：土地分類基本調査「常葉」、福島県、54—63p、1995



# 柱状断面図 (林地土壌)



## IV 土地利用現況

### 1. 概 説

本図幅に含まれる地域は、福島県の東部、阿武隈山地の中央部に位置しており、東半約3分の2は、太平洋へ直接注ぐ夏井川その他の河川の流域に、西半約3分の1は、中通りを北流する阿武隈川の支流の流域に属している。全般に標高も高く、900m台前後の残丘である羽山・矢大臣山・万太郎山等が北東部に、蓬田岳・日影山等が北西部に聳え、その周辺を600～500m前後のなだらかな丘陵地域が広がり、それを前記の諸河川の上流部が侵蝕し、標高約500～400m前後の樹枝状谷底平野を形成しており、かつ部分的には幅500m前後のものも含む袋状小盆地が断続している。また、本図幅内には、JR磐越東線と磐越自動車道および国道49号と同349号が通過しており、さらに県道も各方面に通じている。そのうち、JR線、磐越自動車道および国道349号の結節部である小野町の中心市街地（旧小野新町の市街地で、本図幅名もそれに由来する。以下、ここを「小野新町市街地」と呼称する。）が、図幅の北半中部にあり、またその北東方には滝根町の<sup>かんまた</sup>神俣地区が駅前集落として小市街地を形成している。従って、本図幅における土地利用は、これらの各地域毎の地形的特徴と、主要交通路および市街地域との関連で、地獄的各種の様相を呈していると見ることができる。

耕地や森林の分布を概括的に言えば、北東部の残丘群とその周辺や南部にまたがる丘陵地域および北西部の同じく残丘群とその周辺地域は、森林が多く、耕地や集落の少ない部分であり、一方小野新町市街地付近やその北東方の神俣駅周辺地域と、図幅南西部の平田村地内等は、樹枝状谷の密度も高く、また、やや幅広い谷底平野もあり、水田や畑地が比較的多い地域となっている。水田は樹枝状の侵蝕谷底に、断続的に分布し、畑地は水田に接し小塊状に分布するが、一方、残丘の山麓緩斜面や、一部の丘陵頂緩斜面に、面積のやや広い牧草地がある。

小野新町市街地や神俣駅前を除く小集落は各地に小塊状に分布するが、それらは耕地や交通路の配置に対応している。

## 2. 各 説

### (1) 耕 地

前述したように、各種の耕地は、概略的には地形的性質の相違に対応して分布しており、耕地密度は、小野新町市街地周辺からその北東部にかけて地域と、南西部の平田村地内に高く、一方残丘群やその周辺部と、図幅南東部の丘陵地域には耕地は少ないが、それらの地域の一部には牧草地在やや広い面積で幾つか存在している。また畑地のうち桑畑もあるが小面積で各地に若干あるに過ぎない。

#### a 水 田

水田は小野新町市街地や神俣前市街地を除く全地域の谷底平野に分布しており、地形的対応が明確で、断続した樹枝状形態である。特に南西部の平田村地内では幅狭い樹枝状の水田が密にかつ断続的に分布しているのが特徴である。

また、神俣市街地周辺からその南方地区、小野町夏井地区やいわき市三和町の三坂川沿岸や差塩<sup>さしほ</sup>地区には、やや幅広い水田地帯が見られる。

この地域の水田は、一般的に標高が高いため、冷夏の年には著しく水稻が減収し、侵蝕谷先端の幅狭い水田の一部は耕作放棄されており、現況図では「荒地」と表現してある。

#### b 普通畑（牧草地も含む）

各地の丘陵斜面や小河岸段丘面等に、小塊の普通畑が分布し、葉タバコが多く作付され、また各種の野菜類も作られている。葉タバコの前作の大麦も以前にはかなり作られていたが、現在は殆ど見られなくなった。一方、山地・丘陵地の緩斜面には大型の牧草地在造成されており、例えば、図幅北東部の万太郎山西斜面には阿武隈高原牧場が、図幅南東部の一本山<sup>いっぴん</sup>毛櫛<sup>けし</sup>には乾草供給センターがある。

#### c 桑 畑 等

桑畑は丘陵斜面等に、普通畑に混って各地に小面積のものが分散しているが、その分布は少なく、最近では剪定せず桑の枝の伸び放題のものがかなり見られる。果樹園は殆どなく、いわき市川前地区に一部あるに過ぎない。

(2) 森 林

森林は全地域中の残丘群やその周辺および丘陵地域に分布しており、スギ・マツ等の針葉樹林と、ナラ・クヌギ等の広葉樹林が各地に混在しているが、全般的に針葉樹林が多い。国有林は標高の高い各地の残丘や図幅南東部の丘陵地域に分布し、一部に保安林もある。

(3) 市街地・集落等

都的な市街地は、前述のように主要交通路の沿線である小野新町市街地と、神俣駅周辺部にあり、前者では古くからの商店街と各種官庁・学校および工場があり、近年では運動施設等も造られている。工場はまた前記以外にも国道沿いに近年造られてきている。

その他、役場や学校等のある所にはややまとまった集落があり、また、小塊状の集落が耕地の分布に対応して散在している。

(4) そ の 他

磐越自動車道が平成7年度に、この地域内で開通し、図幅の中央から南東方向へ通過している。北部に小野I・Cが、南部に差塩P・Aがある。この自動車道の側部は切土と盛土の部分があり、その斜面は「荒地」と表現してある。また、先のI・CとP・Aが鬼ヶ城山南部の遊園地とともに「公園・緑地」として表してある。

図幅の南西隅にはダム湖の母畑湖があり、また、ゴルフ場が2ヶ所ある。矢大臣山と東堂山は「阿武隈高原中部県立自然公園」となっている。また、いわき市三和町差塩地区の水田地帯の中に「差塩湿原」があり、ミツガシワ等の珍しい植物も見られ、現在市の天然記念物として保護されている。図幅の中では「公園・緑地」として表現してある。

(奥羽大学教授 大澤貞一郎)

◎お願い

この土地分類基本調査成果を複写又は引用して利用する場合は「土地分類基本調査：小野新町から複写（又は引用）」と御記入くださるようお願いいたします。

平成7年度 調 査  
平成8年度 印刷発行

土地分類基本調査

小野新町

編集発行 福島県農林水産部農地計画課  
福島市杉妻町2番16号  
電話 (0245) 21-7406  
印 刷 株式会社 渡辺印刷所  
福島市春日町1-13